
お姫様との大脱出！？

風汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姫様との大脱出！？

【Nコード】

N4811C

【作者名】

風汰

【あらすじ】

自称普通の高校生、坂元健太。ついに、古風な石の独房から脱出をした彼だが、そこでであった少女との約束は学校に戻っても継続中。彼に平和な日常は訪れるのか？

第1話 始まった？終わった？

今、俺が置かれて居る状況を説明すると……。

「なんだこれ？」の一言だ。

現在の状況は、とっても顔の怖いおじさん（おにいさんもいるのか？）に挟まれ、ガラスすべてにシートが貼ってあり外からまったく見えない装備をされた真っ黒な車の後部座席に容疑者のように手に手錠をはめられて、怖い顔の男性二人に挟まれて座っている状況だ。

何故こうなったか、と少し回想に入らせてもらう。

とりあえず、この辺で一度、自己紹介でもしておこう。

俺は市内のふつーの私立高校に通う、ふつーの高校1年生の坂元健^{さかもとけんた}太だ。

よく漢字の『元』を『本』に間違えられたりする。まあ、今の回想には関係ないか……。

で、今日ふつーの学校からふつーに帰ってきて、家にいつものように入ったんだ。

リビングを見てみると何だか怖い顔の人が両親と話しているのが見えたが、俺はあまり気にせず部屋に上がったんだ。

それから、どれだけ経ったんだろうかな？悪いが俺は細かく時計を見る癖がないんでな。

部屋のドアが乱暴に叩かれた、かなりドッキリしたが、まだ乱暴に叩き続けられるドアを開けてみた

そこにはさっきまでリビングで親父&お袋となにやら話していた顔の怖いおじさん達が笑顔で立っていたんだ。

今考えるとあの笑顔は偽者もいいとこだったんだな……。

それで、手を差し出してきたもんだから、「握手を求めてるのかな？」とか思っただけで俺も握手をしようとして手を差し出した。

が、コレがすべて間違いだったことに俺は数秒で気づかされた。その差し出した手にガチャリと何かがかくつついたからだ。

それは良くドラマなんかで見る、手錠って奴だった。

「ええええええええ？！？」

思わず叫んだね、うん。

俺の手に手錠をはめた事を確認すると、顔の怖いおじさんはおもむろに俺を抱き上げてどっかに運ぼうとした。

「おい！？ちよ！！お袋！親父！！コレはいつたいたんだ？！」

連れて行かれかけてる俺を心配するそぶりも見せない両親に俺は聞いた。

「えつとお。お母さん達いゝその人に大きな借りができちゃつてえゝ」

何故かギャル口調（少し古い気がするが）のお袋。

「それで、まあその借りのお返しで、お前をな」

そういつて、**気持ちが悪いウィンクをする親父。**

「何だよ！？大きな借りつて！！！！！」

目の前で連れ去られそんな息子を心配もせずに、見守るバカ夫婦に向かつて叫ぶ。

「うんとねえ。ここではいえないことかなあ?」

そう言つて、お袋も親父と負けず劣らず気持ちの悪いウイソクをしてくれたよ。

俺を落ち着かせるためにしたのかもしれないが、だとしたら逆効果も良いとこだぞ。

「もしかして……俺を売ったのか……？」

なんとなくだが帰ってくる返事は予想できた……。

俺の前に立つバカ夫婦は声をそろえていった。言い放ちやがった。

「違う違う“プレゼント”だよ。プレゼント」

「ふざけるなああああ——！！！！！！！！」

俺は絶叫したけど、俺を抱えているおじさんは止まるそぶりも見えず、そのまま、車に放り込まれたわけだ……。はい！コレで簡単回想終わり！！

っていうか、あの馬鹿夫婦……。もし帰れたら、絶対復讐してやる！！

でも……。もし帰れたらか……。自分で言っただけ……。しかし、この車はどこに向かっているんだろうかな……。？かれこれ1時間は走ってるぞ。まだかかるのか？

そんな事を考えていたら、助手席に座っている顔の怖い……。こっちはおにいさんか？が

「おい！そろそろ、そいつ寝かしときやあ。くれぐれも乱暴に扱うなや、商品なんやけのお」

はい、今なんと言いましたか？

え？しょうひん？小品？あ、小物か……。違う？

商品？俺売り物？飛ばされるわけ？ちよつとまてえええー！！！！俺はどこぞの不幸少年じゃねーぞ！！？！

少し勇気を出して、助手席に座っているおにいさんに話しかけてみた。

「あの……。俺は今からどうなるんですか？」

助手席に座るおにいさんはにこりと笑っていった。

「大丈夫やなあ。心配せんでも、すぐ帰ってこれる。灰となつてなあれ？最後ぼそりとなんていいましたか？

はい、はい、ハイ！灰？……。？。

灰になつて帰ってくるって、死んでるんじゃない？

死んでなかったとしても、体はないじゃん？

俺は頭に手を当てて、回りを気にせず横に振りまくった。

ガツと鈍い感触と音が聞こえた……。？。

隣を見ると、顔の怖いおじさんが、さらに怖い顔をしていた。

「え．．．？もしかして、あたりました．．？」

「小僧。きいつけやー。車んなかは狭いけえの．．．なあ？」

そう言って、おじさんはニコリと笑った。だから、俺も笑い返して
「そ．．．そうですね．．．。で．．俺は今からどうやって眠ら
せられるのでしょうか．．．？」

聞いてみた、そうしたらおじさんはニコリと笑い返して拳を握りな
がら言った。

「こうするのが一番ええけのお」

その言葉と同時に俺の腹部に衝撃が走った。あ．．．意識が飛ぶ．
．。

どうにか意識を保とうとがんばろうとしたら、追い討ちでもう一発
腹に衝撃が．．．。

「ぐふう」

あはっ。さすがにもう無理だ．．．。

俺は意識を保つ事をあきらめ暗い闇の中へ落ちて行った。

第1話 始まった？終わった？（後書き）

挨拶一括。

短編で『連載をしてみる気はありませんか』といわれて思い立って連載を始めてみました。皆様見てやってください。

感想＆評価お待ちしております。
では、失礼します。

第2話 お姫様、それとも女王様？

ん……。誰か俺の顔を叩いてる……。

うつすらと目を開けてみると、そこには女の子が居た。

んだよ……。俺はまだ寝ていたいんだ……。

この最悪の現実から抜け出すために現実逃避を十分させてくれ……。

そう思うが言葉には出さず、行動で示す。

さあ。もう一度、あの闇の中へー！！

もう一度闇の中へ戻ろうとした時、俺の耳に綺麗な女性の声で恐ろしい言葉が入ってきた。

「早く、起きないと、このまま頭グチャってやつちゃうよー？グチャヨって、もしくはグチャって、良いのかー？」

その声はとても綺麗だった……。などと言ってる場合じゃないのでは？！

俺はすぐさま意識を活性化させ、横に転がってなんだか分からんが避けた。

俺が動くのと刹那の差で、ドゴンと石を潰した音が聞こえた。

一体全体何が起きたんだ？！

俺はすぐに起き上がって、目を開けて前を見た。

そこには、大きな丸太と綺麗な女の子がたっていた。

神秘性のある黒い髪、白い肌、人形のように整った顔立ち。その子の周りだけ光っているようにも見えた。

何を食えばあんな美少女になるんだろうか？参考に親御さんからお話を聞かせていただきたいもんだ。

「って、そんな事を考えてる場合じゃねえ！お前、もしかして本当に俺の頭を潰す気だったのか？！」

なぜならさっきまで俺の頭があった場所（だと思う）にピンポイントで極太の丸太が突き刺さっている。

「うん。あんまり、おきないからいつそ殺^やっちゃえって思った。」
目の前の美少女は危険発言を平坦に言う。

「なんですか?!その危険思考は!!!?もしかして、あれか?自分の思い通りにならないものは、全部壊しちゃえ思考か?!」

「ううん。言うこと聞かないのは壊さなくて、調教する。」

結局危険思考かよ!、俺は思わず目の前の危険思考美少女にツッコム。

しかし、あのすらりとした華奢な体のどこにあの丸太を動かす力があるんだろうか?

両者は少しの間顔を見合っていたが、目の前の危険思考美少女が話し始める。

「まあ、私のことはどうでも良い。協力者がほしかった」

危険思考美少女は勝手に話を進めようとしやがる・・・。

「いや、お前にとっては自分のことで関係ないかもしれんが、俺は知りたいんだ。せめて名前くらい言ったらどうだ?」

とりあえず話を進められるのは困るので、目の前の美少女に自己紹介を諭す。

「チツ・・・黙ってついでにくれればいいんだよ・・・。」

あれ?今、何だか舌打ちした後になんかつぶやいた?

「私の名前は柊^{ひいらぎ}姫香^{ひめか}。お前と同じ理由でここに居る。」

あ、案外簡単に自己紹介してくれた・・・じゃあ、さっきのつぶやきは気のせいか・・・。

「なるほど・・・俺は坂元健太^{さかもとけんた}だ。」

俺もとりあえず自己紹介してみる・・・。

しかし、柊は「そう」の一言だけ言った。

俺の名前に興味はないのか・・・。

「じゃあ、さっさと協力して。」

また勝手に話しを進めるきか・・・まあ、良い。少しだけ付き合っ
てやらんでもない。

「さっきから言ってる、“協力”って何だよ?」

とりあえず、このことだけは聞いておこう・・・。

「黙ってついてきて、私の命令した時に行動しろ。」

あつははは。いきなり命令調かよ・・・。

しかも、『私が命令したとき』だって、どれだけ女王様気質？あははは。

「アホか。なんで、俺がお前の命令とやらで動かなくちゃいけねーんだ？」

ふん。そんなに動かしたいなら勝手にマゾ野郎でも捕まえてくればいいんだ・。

そんなことなら、俺は参加しねーよ。

「俺は帰らせてもらうぜ」

それだけ告げて、俺は自分の家に向かって・・・向かって・・・向かって・・・あれえ？！

周りにあるのは石でできた壁だけ。

「あなたは、馬鹿なの？ここは、商品を置いておく倉庫。ドアなんて外側からしか開かない」

柊は平坦に言い放った・・・言い放ちやがった・・・。

「なんだと？！ってことは、俺は閉じ込められて出荷を待つだけの牛か？おい！！」

「うん、このまま待てばそうなる。でも、私に協力すれば脱出できる。」

柊は自信ありげに宣言した。

「へえー。じゃあ、何でお前は今まで逃げてなかったんだ？」

俺は思った事をそのまま口に出した。すると、柊はこっちを向いてぼそりと言った。

「五月蠅い、・・・だなあ・・・。」

え？おい！？今、完全に俺の悪口いったらどろ？なんていったかは聞こえなかったけど・・・。

「私だけじゃここから脱出できない。だから、協力者を待ってた。」
柊はそう言って、俺の顔をジーっと凝視し始める。

う・・・なんか、「協力しろ、協力しろ、協力しろ、協力しろ」って念が伝わってくる気がする・・・。

「あー。分かった分かったから！そうやって俺を凝視するのをやめろ！協力してやるよ！！」

ついに俺は根気負けをして、終に協力することにした・・・。

「ふん」

あれ？何か、今鼻で笑われたぞ？え、どういうこと？

「ちよろいもん」

あ、またなんか言ったぞ。

くそ、また聞こえなかった・・・。

しかし、協力するといってしまったのが間違いだったんだ、ということに俺はかなり後に気づいたよ・・・。

第2話 お姫様、それとも女王様？（後書き）

第2話の掲載完了。

今回は短編の時とほとんど変わってません。

まあ、1話も特筆変わったわけではないのですが・・・。

今回の変更点は姫香の口調ですかね。

短編と見比べてみると少し分かるかもですw

では、ご感想&評価お待ちしております。

それでは、失礼します。

第3話 命令はなるべく簡単に

さて・・・現在俺はあの古風な石でできた独房から脱出し、良く分らないまま、壁から地面まですべてが石でできた通路を姫香と歩いている。

呼び方が変わっている事については、今から始める回想内で説明させていただく。

つてことで、回想開始。

「じゃあ、ついてこい。」

柊はそう言って、歩き始める。

ま、このときはまだ柊と呼んでいたんでそのまま言わせて貰う。

俺も『協力する』と言った以上、ついていかなくてもはいけないので前を歩く柊の後をついていった。

石でできた壁の前まで歩くと柊が急に振り返った。

「のわ?!」

あまりに急だったもんだから俺は思わず声を出してしまう。

そして、柊は俺の顔を見ながら初めての命令を言った。

「この先は私の事を『姫香』と呼ぶようにしろ。」

どこのギャルゲだと、一瞬だけ俺は思った。

だって、あつてすぐの人間に名前を呼ぶように言うのは、ギャルゲの中だけだろ？

しかも、好感度は高くないと起きないイベントだ。

まあ、こいつのことだから百歩譲ってもそんなことはないんだろうな・・・。

考え込んで俺を無視して姫香は前を向きなおす。

そして、石の隙間に手を入れ込んだ。すると、石が簡単に、ブロックを外すかのように外れた。

「な?こんな簡単に開くもんなのか」

目の前でせつせと石を外す姫香を眺めながら俺は聞いてみる。

数秒経過……。どうやら、俺のことは無視らしい。

石を外し終え、姫香がこっちを向いていった。

「じゃあ、行くぞ。」

「へいへい。ついていきますよー。」

俺は適当に返事して姫香の後について行った。

で、回想は終わりで冒頭に戻る。

さて、あの古風の独房を脱出してどのくらいがたったのやら……。俺と姫香は冒頭で言った通路を二人並んで歩いている。

どうやら、姫香はこの場所について異常なまでに詳しいようだった。この辺は、先の石をはずして見せたあたりで分かると思う。

沈黙に耐えられなくなつて、俺は前をずんずんと進んでいく姫香に話しかける。

「おーい。で、今これはどこに向かつてるわけ？」

「今は、ここを管理している組の組長の所に向かつてる。」

今回は無視されなかったか……。だが、おかしい言葉が聞こえたのは気のせいかな？組長とか組とか組長のいる場所とか

「そして、その組長のいる場所まで行くためには、ちょっと私だけじゃ力不足だった。」

なるほどね。それで、俺を協力者兼奴隷か下僕で連れてきたわけか……。

そのとき、前の方から人の足音が聞こえた。

「ちっ」

姫香が立ち止まって舌打ちをする、大方俺達が脱獄したのがばれたんだろうな……。

「おい。どうするんだ？」

立ち止まった姫香に話しかける。

「おい？きいてんのか。」

反応を示さない姫香にもう一度話しかける。

ん？何か取り出したぞ……。

「はい。じゃあ、二回目の命令。これで、あいつらを撃退しろ。」

そう言つて、俺に渡すのは……拳銃？え？

「つて、ええええええ？！ちょ？！これでどうやって撃退するつてんだ！？」

俺は初めて渡された、この黒光りする拳銃を持ってあたふたする。

「簡単。それで、あいつらをパンパンつて殺^やっちゃえ。」

あわてる俺に姫香は平坦に命令した。

おいおいおい、俺はこの歳で殺人犯か？そんなのは嫌だぜ……。

「大丈夫。正当防衛が成立するはず。」

俺の顔に言いたいことが書いていたのか姫香は説明する。

「いや、でもな……。それはそれで……な？」

俺はとにかく拳銃を使いたくなかつたから、姫香を説得しようと話す。

すると、姫香は大きなため息を一つついていった。

「もういい。私が、やる。」

え？、と俺は思わず声に出した。

「お前がやるつて、どういうことだ？！」

俺が言ってる言葉も聞かず前から走ってくる顔の怖いおじさん達に銃口を向けている。

「え……。もしかして……？」

止めようとした瞬間、パンパンと銃声が響き渡った。

その銃声の後に遅れて男性の叫び声が聞こえてくる……。

つていうか、こんな華奢な体の女の子に銃なんて撃てるのか？
肩が外れそうになるとか聞いたことあるぞ？

しかも、良く見たら……。持ち方がプロだ……。

こいつ……。慣れてやがる……。

「殺しちゃったのか……？」

俺は目の前の状況に驚きながら、恐る恐る聞いてみる。

「ふん。私がそんなへまをするわけない。」

そう言つて、さつき撃った奴らを指差す。

「あ、ほんとだ……」

見てみると抑えているのは手足や肩だ。

『へま』とか言ってるあたりこいつは本当に慣れてやがると確信がもてた。

「ほんとに役に立たない下僕だ……。まあ、良い。さっさと行く」
そう言つて姫香は歩き出す、俺もその後を金魚の糞のようについて行く。

さつきの場所から少し走つて、周りが静かになったところで聞いた。
「ところで、組長の居る所に向かつてるって何でなんだ……？」
まあ、俺が聞くのも無理はないと思う。

そもそも、これだけ詳しく組長の居場所まで知ってるんだから、そんな場所に行かなくても逃げ切れるはずだ。
にもかかわらず行くんだから、それなりに理由があると踏んだわけだ。

「一言。そいつに、一言、言いたい……。」

さつきまでと比べるとかなり弱々しい声で言つて姫香はうつむいた。
「そうなのか……。」

きつと、こいつは何か抱えてるんだろうな……。

そんな風に少しシリアスモードになっていたのに……。

「そして、手足を縛つて……ふふふ……ふふふふふふふふ」
なんて、空気が読めない奴だ……。

少しでも心配した俺が馬鹿だった。

「ま、いいか……。」

俺はため息を交えて一言言つた。

それから、少しだけ歩くと周りと雰囲気少し違うドアの前に着いた。

「なんだ、ここは？」

「ここは組長の居場所まで繋がる通路の間にある、四天王の部屋。」
独り言のつもりで言ったのだが、姫香が様相外に答えてくれた。

しかし、四天王？どこぞのリーグかよ、ここは？

「四天王に勝てないと、組長のいる場所までたどり着けない。」

姫香が説明するが、俺はあほらしくて頭に手を当てる・・・。

「こいつらに勝つのは私だけじゃ無理・・・じゃないけど、めんどくさいから協力者がほしかった。」

なるほど、まったくお前らしい言い方だな、どうせ本当は一人で挑むのが不安だったとかだろ？ははっ。

俺は普段偉そうな姫香の唯一の弱みを見つけた気がして、心の中でけなしたら・・・顔面を思いつき殴られた・・・。

「いてえ！？なにしゃがる！！？」

姫香を睨みつけながら言うと、姫香は「お前がまた変な事を考えていたからだ。」

どうしてそこまで俺が考えてることが分かる？、とのどまででかかったが

ここでそついうと変な事を考えていたと認めてしまうことになる。
そうなればさらに拳の連打をくらいそうだ。

「で・・・何故、お前はドアを開けて中に入らないんだ・・・？」

俺は起き上がりながら、話を変えるつもりで疑問に思った事を聞いてみた。

すると姫香は無言でドアノブを指差し、一言命令。

「お前があける。それくらいは、できるだろ？」

なるほどな・・・。俺はなんか釈然としなかったが、ドアを開けた。

不本意だがその先に待っている四天王とやらと戦うために・・・。

第3話 命令はなるべく簡単に（後書き）

さて、3話です。

新キャラ登場フラグが立ちました。

四天王です。

とにかく、コメディーなのでバカらしくしたかったですw
四天王もバカを書きたいと思います。

さて、3話ですが大幅な変更&追加があります。
短編を読んだ方はよく分かると思いますw

では、ご感想&評価お待ちしております。

ここまで読んでくださり感謝です。

それでは、失礼します。

第4話 はじめての四天王

ドアをあけると、そこには広々とした部屋が広がっていた。そして、その広々とした部屋の奥には、もう一つドアがある、その前には顔の怖いおじさんが座っている。

髪の毛はない、一言で言えばハゲって奴じゃないだろうか。

姫香はドアが開いたのを確認して、俺が入るより先に部屋に入り、奥に座っている顔の怖いおじさんの所までずかずかと歩いていつている。

俺もその後を追いかけていった。

「ふん。お前が脱獄を試みたバカ野郎だな。」
奥に座っていたハゲのおじさんが言った。

顔が怖い以外にも特徴があるのでこちらで呼ばせてもらうことにする。

「しかし、なんで嬢さんが協力してるかがわからんなあ」
ハゲおじさんは本当に不思議そうに言った。

『嬢さん』という言葉が少し引かかったが、まあ、聞かない事にする。触らぬ神に祟りなしって奴だ。

「違う。こいつは私の下僕だ。」

姫香はあっているのか良く分からない訂正をした。って、俺はついに協力者から下僕に格下げか？

「ま、どっちでもいい。ここから先に進みたければ、第1の四天王“笑いのゲン”を倒してすむんだな!!」

ハゲさん（名前を教えてもらってけどこっちの方が気に入ったからこっちで呼ばせてもらう）は立ち上がりながら言った。

格好良く言ったつもりなんだろうが、「なんだそのダサイ二つ名は？」と姫香にはつきり切られて落ち込んでいた。

このままでは、話が進みそうにないので俺はハゲさんに話しかける。「それで・・・俺達はどうかやって貴方を倒せば良いのですか・・・

？」

聞いてみるとハゲさんは復活して、叫ぶように言った。

「簡単な話だ！俺とお笑い勝負をしてもらうのだ！！！」

思わず、俺は『はあ？』と聞き返してしまった。

だが、誰も俺を責められないはずだ。誰でも、こんな状況でこんな事を言われたらそういうだろ？

「良いだろう。受けてたつ！！」

あれ？姫香はノリノリだ。

「ふははは！それは良い心がけだ！！しかし、そんな物ではこの“笑いのゲン”には勝てん！！」

俺をおいて、二人は話を進めやがる……。しかし、本当にダサイ名前だな……

「ふん！この男は、面白さで世界を救う男だぞ！そんな奴がお前ごときに負けるか！！」

ん……。？チョット待て？

姫香が指差してるのは俺だよな、後ろー誰も居ない、右ー居ない、左ー勿論だれもないー。

……。……。……。……。俺か？

「おいおいおい！！！！なんで、俺が笑いで世界を救うんだ！！？そんなスキル持ち合わせてねーぞ！！！」

俺は必死になつて姫香に言ってみた、すると一言……。

「下僕なら救え。命令だ。」

なんだそれはあああああああ！！！！？

んな命令を実行できるか！！

「ふははは！良い自信だ。今から10分やる、その間にネタを作り上げる！！」

ハゲさんは高笑いしながら言つて、最初に座っていた場所へ戻っていく。

「必ず、私が勝つんだ！！覚悟しておけ！！」

ははは……。二人は見事に俺を置いて話を終わらせやがった……

。

そして、俺と姫香はネタ作りとやらを開始した・・・。
が、姫香が俺の意見を呑むわけはなく、最後はやっぱ姫香が決めた。

「アドリブだ。」

一言バツサリ・・・。

「おい、そんなので勝てると思ってるのか？」

ふざけているとしか思えず、一度確認してみた。

「勿論だ。」

自信満々だなーおい。その自信を少しだけでも俺にわけてくれるとうれしいのだが・・・。

「さて、こっちのネタ作りは終わった。あいつに伝えて来い、さっさと始めて終わらせるぞ。」

命令されハゲさんの所へ向かって、俺は歩いていった。

「なんだ、もう良いのか。それで俺に勝てるネタができたのか？」

ハゲさんはニヤリと笑って聞き返す。

正直言いますと。勝てる自信はまったくありません。

「ま、終わったのなら。さっさと始めるか」

ハゲさんはそう言って立ち上がった。ああ・・・勝てる自信がない時はどうすればいいのか。誰かここに来て教えてくれ・・・。

「あ、言い忘れたけど・・・ここで負けたらお前は縛り上げて即刻売りだからな」

おいおいおい。今更そんな事を言うってのはありか？

どうするんだ？ここで負けたら俺は二度と日本に帰って来れないんだぞ。

「ふはは。今更怖気づいたか？」

ハゲさんが皮肉たっぷりに言って笑った。

ええ、まったくその通りですよ。俺は口に出すのはあれだったので

心の中で言葉を返す。

そして、ここで少しだけ疑問を聞いてみた。

「ところで、ハゲじゃなくてゲンさんはどんなネタをするのですか・
・？」

教えてもらえるわけないよな、と言った後に感じ姫香の場所へ戻ろうとした時

「良いだろう、一つだけ。ネタを見せてやる。」

ハゲさんが自信ありげに言って・・・・・ネタを見せてくれた。

一瞬意識が飛んだ・・・。

なぜかって？ほら、あまりに寒いと眠くなるじゃないか。そんな感じだ。

ハゲさんはネタを見せてくれた後、高笑いをして歩いていつていた。ネタを見せてもらっての結論。『勝てる』

細かいところを少しだけ省いて言わせて貰う。

俺達からネタを見せることが決定し、服を着替える事を提案され、

俺と姫香は服を着替えた。

俺はラフな格好、姫香は今時の女の子の格好に着替えた。

ちなみに、姫香の格好は反則なまでに似合っていた。

さつきとは違う意味で意識が飛びそうだった・・・。

そして、ネタをどうやって見せるかを説明された。

目の前にはカメラがセットされていて、このカメラは一般人の観客が見ているモニターに繋がっていて、ネタを見せ、面白ければボタンを押してもらう。

で、ボタンを押した数が多かった方を勝ちとするのだそうだ。

ちなみに、観客の反応はカメラの上部にあるモニターで確認可能である。

俺はハゲさんのネタを見ていたので勝てると核心が持っていた。

ちなみに、やる気満々で自信満々の姫香は今現在も変わらずだ。

「ふっふっふ……。私の力で会場を笑いの渦に巻き込んでやる。」
ぶつぶつこんな事を言ってるやがる。

「じゃあ！ネタを始めろ！！」

ハゲさんが高らかに宣言して、俺達のネタ発表が開始した。

「どもー！こんにちはー！！」

とりあえず、最初はテンションを高くしておこうと俺はテンション高めで言う。

その後についてきて、姫香が「どもー」と言っていた。

そして、姫香が最悪の一言を言った……。。

「ロシアの殺し屋、おそろしあ！！！！」

ええええ？？？

こいつも、ハゲさんと同じレベルかよ！！！！

なんだ、このくだらんかつ面白いギャグはっ！！？

俺は思わずいつもの癖で心の中でツツコンでしまった。

いそいで、口に出してツツコン直してみると……。腹にとつもなく強いけりを食らった。

「がはっ……。。」

腹が痛い……。俺は腹を押さえ、地面に倒れこむ。

「貴様は私のネタにケチをつけられる身分なのか？」

倒れこんでいる俺に追い討ちをかけるかのように姫香は俺を踏みつけた。

そんな事をいわれても、お前の言ったギャグのおかげで観客みんなの顔が凍ってるぞ。

俺は顔を上げた。そこで、あるものが目に入った……。

言ってなかったが、この時、姫香はマイナス力をはいていた……。

俺の顔の位置は地面スレスレである。そして、姫香は足を上げて俺の背中を踏んでいる……。

さて、俺の目に入ったの何でしょうか？

答えは俺の発言から察してくれるとありがたい。

「あ・・・クマ」

言った瞬間俺の顔面に姫香の強力キックが突き刺さる。

「ぐはっ!!」

俺は顔を抑えてもがく。

「お前は・・・どれだけ、私を怒らせれば気が済むんだ？」

姫香がわなわなと震えながら聞いてくる。

あー・・・やばい・・・俺死ぬかも・・・。

思った刹那、俺は姫香の超連続コンボを食らった。

コンボを食らっている時に見えた姫香の顔が心なしか赤かった気がする・・・ちよつとだけ可愛かった。

ネタの方は俺がボコボコにされるといふ物で終わってしまった。

が、しかし、幸か不幸か観客のほとんどが笑っており、ボタンも結構押されていた。

これで勝ったも同然だ。

ハゲさんのネタというかギャグは確実に受けない。先の姫香のギャグでもそのことは分かる。

「ふははは!!中々やるではないか!!」

ハゲさんが『お前はすごいけど俺のほうがすごい!』と確信しているのかと思うくらい高らかに笑いながら言う。

しかし、ハゲさん。あなたのギャグはきつと受けませんよ。これだけは、賭けても良い。

と、言うわけで・・・。。。

ハゲさんのネタ発表会終了!。はい、そこ拍手を上げて。

何故省いたかだって?

ハゲさんが最初からとばしてたもんだから、俺の意識が保てなくなっただよ。

でも、とりあえず勝利は確定したようだ。

なぜなら、集まっていた観客が誰一人いないからだ。

ハゲさんはあまりのショックで固まってる……。

すると、姫香が俺の横を歩いてハゲさんのほうへ向かっていくので、俺もその後をついて行く。

何しに行ってるんだ？ ああ、あのドアの鍵でも貰いに行ったのかな？ しかし、俺の予想は全然違っていた……。

姫香はハゲさんの横に立ち言った。

「面白かったぞ！」

んなっ？！

「お前はあんなギャグが、面白かったというのか？！」

俺が思わず聞くと、姫香がむっとした顔をしていった。

「お前には、この人の笑いが分からないのか！！？」

正直に言います。さっぱりです、はい。

「私は間違っていた！ 笑いで世界を救うのはお前ではなく、この方だ！！！」

そう言っただけで姫香がハゲさんを指差した。

おいおいおい。俺達の発表の時にも思ったがこいつはもしかしてではなく確実に笑いのセンスがおかしい？

それに少しだけ腹が立つ。確かに、俺には笑いで世界を救うスキルは持ち合わせちゃいないが、あんなネタ以下といわれて悔しいわけはないぞ。

そして、俺は固まっていたハゲさんの方を見てみた……泣いとる！

「嬢さん……。そんな風に言ってくれるなんて……。うう……」

「

何だか、俺が入れない領域でアホ二人の美しき友情物語が始まりそうだ……。

第4話 はじめての四天王（後書き）

うむ。今回はほとんど健太のナレーションで話が進んでる。
もう少し面白くなると思ったんだけど・・・。

健太が何を見たかは・・・ご想像にお任せしますw

ここまで読んでくださった方々感謝です。

ご感想＆評価お待ちしておりますw

では、失礼します。

第5話 寝る時はちゃんと自分の寝る場所で寝よう

水が滴る音。

熱いけど、わずかに心地よい温度の湯気が閉じられたドアの隙間から、わずかにこぼれている。

現在、俺は中々広い部屋でソファ―に座って天井を眺めている。

ちなみに姫香はこの閉じられたドアの先でシャワーを浴びている。

まだまだ時間がかかりそうだ、暇潰しを兼ねて回想でもしよう。というわけで、回想開始。

お笑い勝負の後、なんだかよく分からない友情物語が始まっていた。

「じゃあ、ここはやっぱりこういうギャグのほうがいい。」

「いや、嬢さん。ここはこっちの方がいいぞ」

なんだか新ネタ作りを開始して、二人で和気藹々と話しこんでいる。ちなみに、この話し合いが始まってだいぶたっていた。

この建物（だと、思う）には時計がないから、正確な時間は分からないが……

さすがの俺も見るに見かねて、姫香に話しかける。

「おい、姫香。いい加減、先に進まないか？お前もさっさと進みたいんだろ」

俺が言うと、顔を見合わせて楽しそうに話していた姫香がギロリとこつちを睨んで言った。

「ふん、空気の読めない下僕だ。」

おいおい、この先の組長に話があるのはお前だろ。何故俺が捨て台詞を言われねばならん。

「まあ、良い。そろそろ進もう」

姫香は立ち上がり、膝をパンパンと払って言った。

するとハゲさんも立ち上がりズボンのポケットから何かを取り出した。「進むのか。こいつが、あのドアの鍵だ」

そう言つて鍵を姫香に手渡すと、俺達が入ってきたドアのほうへ歩いていき、外へ出て行つた。

ハゲさん。今度会うときはもっとまともなネタを見せてくださいね
俺は部屋から出て行くハゲさんの背中を見つめながら、つぶやいた。
まあ、二度と会うことがない事を祈るぜ・・・真面目に。

そして隣の姫香を見た、俺のほうへ鍵を突き出してやがる。

「はい。これで、お前が鍵を開けて、ドアを開ける。」

はいはい。どうせ自分では動かない怠け者お姫様。

俺は突き出された鍵を受け取つて、ドアを開けた。

そこには、さっきの部屋より広くはないが、部屋としては広い部類
に入るくらい広い部屋があつた。曖昧な表現だが、中々の広さだつた。

「なんだ、ここは？」

開けたドアを閉めて姫香に聞いてみる。

「ここは四天王に勝つた者が休息を得るために使用する、VIPルーム」

姫香が教えてくれる。この建物の設計者は一体何を指して、こんなもんを作つたんだろ、と新たな疑問が生まれる。

しかし、完璧なくらいにまで設備が揃つてやがるなあ・・・。

シャワーをはじめとし、ソファ、ベッド、キッチン、その他もある。

ここで十分暮らしていけそうだ。

「さて、私はシャワーを浴びてくる。お前はここで待っている」

急に姫香が言い出した。

「そうかい・・・。じゃあ、俺はお前が出てくるまで待つてれば良いんだな」

俺は適当に返して、ソファに座る。

姫香はシャワールームに向かつていこうとして、振り向いていった。
「・・・覗くなよ」

「お前なんか誰が覗くかよ」

俺は姫香に変な誤解をされないために言っただつてもりだつたのだが、変な誤解をされて顔面にパンチを食らった。

はい。回想終了。

で、俺は殴られてあざができてそんな顔をなでながら、姫香がでてくんのを待つてるわけだ。

しかし、あの時なんていえば殴られなかったんだろうか……。大きなため息をついたとき、シャワールームのドアが開いた。

「おう、やつと出てきたか……。ずいぶんと長かったな、なんだ風呂にでも使つてたのか？」

俺は言いながらシャワールームの方を見た……。んな？！そこには、バスタオル1枚の姫香が立っていた。

「お……。おま……。お前。なんて格好してやがる！！？」

俺が叫ぶと姫香は一言言った。

「暑いからだ。」

いやいや、答えになっていないぞ。暑いからって良い年頃の娘が男の前でバスタオル1枚はおかしいぞ。

まあ、何歳か知らないけど……。

すると姫香は鼻で笑って俺のほうへ近づいてきた

「なんだ、お前は私の裸が見たいのか？」

挑発的な顔をしながら、姫香は言った。少しだけ頭に來たのですぐに言い返した。

「はん、だあーれがお前見たいな奴の裸なんて見て喜ぶか・ガハッ！！」

また顔を殴られた。やばい……。意識が飛ぶ……………

「お前になんか見せてやらないからな！！」

姫香は怒って言って、シャワールームへ戻って行った。

「はははは……。誰も見たくなんてないっての……。。」

言いながら俺は地面に屈した。

それから数分して、姫香はシャワールームから出てきた。

今度はパジャマ姿だった。ちなみに、柄はクマ・・・こいつには似合わないかわいらしい物だった。

「しかし、なんでお前はパジャマ姿なんだ？」

「そろそろ睡眠時間だからだ。」

姫香が答える。なんでお前は時間が分かるんだ？

「シャワールームに時計があっただろうが。それに、そこにも」
そう言っ指差した方向を見ると確かに時計が設置されていた。
さつきからずつとこの部屋にいたが全然気づかなかったぞ。

「お前は洞察力が乏しいな・・・まったく。」

姫香はあきれたように言う。

五月蠅い、大きなお世話だ。俺は普通の高校生なんだ。

「しかし、少し腹が減ってきたな・・・。」

そういわれて、俺も空腹感を思い出す・・・。

確かに、学校から帰ってすぐに俺はここに連れてこられたからな・・・。

「よし、お前が何か料理を作れ」姫香が命令した。

まったく・・・いきなりだな・・・おい・・・。

「どうした？もしかして、料理を作れないとかか？」

姫香が俺の顔を覗き込みながら、「ふふん」と笑う。

「はーっははは！何バカな事を言ってるんだお前は！！俺が料理を作れないだとお？！残念だったな、俺は料理は得意中の得意だぜ！

！！！！」

そう。実を言うと俺は料理を作るのが得意だ。かなり美味しく作れる自信がある。

「ほう・・・。そこまで言うのであれば、私を満足させるが良い！

！」

姫香は挑発に乗ったようだ。ふふ・・・目に物を見せてやるぜ。

というわけで、俺は料理に取り掛かった。

数十分経過・・・。

姫かは俺の作った料理を口に運ぶ。そして、感激したような顔をする、しかし、俺の方を見て慌てていつもの顔に戻して一言。

「美味しくない・・・。」

言ったすぐ後に・・・。

「だ・・・だけど・・・持ったないから全部食べる」

まったく、正直じゃねーな・・・。

俺がため息をついて姫香のほうを見ると、姫香は何故か焦って・

「べ・・・別に・・・美味しいわけじゃないぞ。美味しくないけど、食べないともったないし・・・おなかすいてるし・・・そうだ、おなかすいてるから食べるだけだからな！」

「はいはい。分かった、分かった、早く喰え」

俺は少し笑いながら言った、なんだか姫香が可愛く見えた。

結局、姫香は俺の作った料理を完食した。

ま、食べてる間中、呪文のように「美味しくない、全然美味しくない」って繰り返してたけどな・・・。

で、俺達は眠ることにした。姫香がベッドで俺はソファで寝ることになった。

というか、強制的に決められた。

やっとうとうと始めた頃、俺の上に何かが乗った。

「ぐはっ！」

突然だったため咳き込んでしまう。

おいおい・・・一体何に乗っちゃった・・・。

俺は心の中で愚痴る。もしかして・・・コレが巷で噂の金縛りって奴か？

そろーっと、自分の胸の上あたりを見える・・・。

「んなつ?!」

思わず声が出た。

俺の上に乗っていたものの正体・・・それは姫香だった。

どうやら寝ぼけて俺の上に乗ったようだった。

「おい。姫香・・・そこからどけて」

胸の上ですやすやと寝息を立てている姫香を揺さぶりながら言う。

しかし、一行に目覚める気配はない・・・。

「ん・・・おとうさん・・・なんで・・・お母さん・・・」

なんだか寝言を言ってるやがる。しかし、良い匂いがするし当たってはいけない所が当たってる・・・って、そんな事を言ってる場合じゃねえ。

早くこいつを起こしてもとの場所にはこぼねーと

俺は今度はさつきより大きな声で呼びながら、強めに揺さぶった。

すると、俺の体から姫香の体が転がり落ち、地面にぶつかりそうになる・・・。

「あぶね!!」

俺もソファーから飛び降り、姫香の体を受け止めた。

「ふう・・・危ない、危ない・・・。怪我させちまうところだった・・・」

俺が安堵の息を洩らしていると、姫香の目が開いた。

「な・・・何してるの・・・」

姫香が何故か口をパクパクさせながら俺に聞く。

「え?何って・・・」

そこまで言って、俺も今の状況に気づく・・・。

俺の現在の状況、地面に寝ている姫香、その上に覆いかぶさるようになっているのが俺・・・

やばい・・・コレはとってもやばい・・・完全に誤解を招く体制だ・・・。

急いで弁解使用としたとき、姫香のパンチが顔面にヒットする。

ああ・・・今日は何だか殴られてばかりだ・・・。

そんな事を考えている俺に姫香は思いつきり怒鳴る。

「な・・何をしようとしたんだ！！？この変態下僕！！！」

「いや・・・あの・・・な・・・。お前が勝手に俺の上に・・・。」

必死に弁解しようとするが、姫香はまったく聞く耳を持たず・・・

「お前はこつやつて夜を過ごせ！！！！！」

そう叫んで、俺を縛り上げ吊るした。

「え？ちよー！待てつて！おい！！このまま眠れつてことか！！？」

「五月蠅い、五月蠅い！！黙れ、黙れ！！私にあんな事をした罰だ！！！！！」

姫香はそう言つて自分のベッドへ戻つていく、怒りのあまり顔が真っ赤になつていた・・・。

その夜俺は吊るされたまま寝ることになった・・・。

朝、目覚めた姫香におろしてもらつた・・・。

あの後、俺はまったく眠れなかった。

顔を見てみると姫香の方もあまり眠つてないようだった。

その後、俺達は眠い目を擦りながら、VIPルームを後にし、次の四天王を目指した。

第5話 寝る時はちゃんと自分の寝る場所で寝よう（後書き）

坂元の意外な特技が明らかになりましたねw

そして、姫香の意外な一面も明らかに・・・（え

今回は何だかラブコメ的展開でした。

個人的には大好きな展開ですw（え

ま、自分で書いてる小説だから大好きに決まってるのですがねw

では、ここまで読んで下さり感謝です。

ご感想＆評価をお待ちしておりますw

それでは、失礼します。

第6話 ナルシストとキザくさい

さて、現在俺と姫香は二人目の四天王とやらがいる部屋の前に立っている。

しかし、こんな事をしていると、ここの組長は一体何がしたいのだろうかと、疑問がわいてくる。

いや、ほんとに何がしたいんだろうかね……。

俺はため息をつく。ふと隣を見ると、また姫香が腕を組んで仁王立ちをしてやがる。

良く見るとあごでドアをさしてるな……俺にどうしろと？

「ドアを開ける。」

なるほどな。まったく、ちいとは動かないと太るぜお姫様……。

「まったく、使えない奴だなお前は。このくらいのこととは私から言われなくても察して先に行動しろ」

そんな無茶苦茶な命令は受理できんな。俺はエスパーでもなければ、精神科でもないんだ。

しかし、命令されたのであれば動かなくてはいけない。

俺は二人目の四天王が待つ部屋のドアを開いた。

そこは前回の四天王、通称ハゲさんが居た部屋と変わらない構造になっっていた。

だが、一つだけ大きく違うものがあつた。

部屋中に鏡が置いてあるのだ。ドレッサーから、手鏡、なんとサイドミラーまで……。

部屋の奥には、前回と同じような椅子がおいてあつて、男が座っている。

この人は、明らかにおじさんじゃないな、それに、顔もまったく怖くない。

その辺を探せば、いくらでも見つかりそうな優男だ。座っていた優男が立ち上がり、こっちに歩いてくる。

「やあ。ゲンを倒したらいいね。」

優男は俺と姫香の前で立ち止まり言った。

ゲン？・・・俺はふと考えた。

ゲンなんて名前の奴いたっけ・・・？ああ、思い出した。ハゲさんの事か！

あの人も結構、変だったよなあ・・・。

しかし・・・こいつもまた変な奴なんだろうね。

内面的な事は分からないが、上から下までを見るとよく分かる。

一体何なんだ？こいつのファッションは。

なんだか、とてつもなくダサイ。しかも、顔を見る限り微塵も『ダサイ』とは思ってないんだろうよ。

「さつさと、私を先に進ませろ。」

姫香が目の前の優男を睨みながら言う。

すると、優男はフラッとよろめき、クルンと一回転し、地面に倒れこんだ。

なんだ、このオーバーアクションは？

「ああ・・・。そんな・・・お嬢様が・・・そんなお言葉遣いをなさるなんて・・・。美しかった、あなたは一体どこへ？」

ハンカチを取り出し、涙を拭きながら、優男は言う。

あなたの言う姫香はきつと何年も前に消えてますよ。

数年でこんな性格になるわけないからな。

っていうか、姫香と優男は過去に会ったことがあるのか？

隣に立っている、姫香をチラッと見てみる、いつもと変わらん不機嫌顔だ。

多分、優男とあったことあるんだろうな。顔から察すると思い出したくない記憶なんだろうな。

じゃあ、俺はあまり詮索しないようにするぜ。触らぬ神に祟りなしだからな。

「ああ、どうして。美の象徴だったというのに！この美の化身の僕を超えているお方だったのに！！！」

優男は本当にショックを受けたように言う。自分で自分を美の化身というとはね。あまりに話が進まないため、俺も少し口出しをさせてもらう。

「あの。で、俺達はどうやってあなたを倒せばいい・・・」
言いかけたとき優男がぐるんと変なひねりを入れて立ち上がった。
しかも、目がさつきと明らかに違う。

「お前か・・・？お前が、お嬢様をこんな、こんな風にしたのかぁ・・・？」

怖っ！！マジで怖いぞ！？この人は！！

俺はなんだか殺気を感じて後ろに飛んだ、俺が立っていた地面に優男の拳が叩きつけられる。

んなぁ！？地べたが砕けた？！！おいおいおい、どこの超能力者だよ！！

「ふふふふ。第2の四天王“美のシユウ”です。どうぞ、よろしく。僕は美しい物が大好きなんだ、だから美しくない物は嫌いなんだよ。」

優男の声の怖さがだんだんと増していく・・・。

「だ・か・ら、まず最も美しくないお前は消え去れ！！」

叫びながら、優男は拳を振り上げて俺めがけて突き出す。

おいおいおい！！！！なんで、いきなりマジバトルモードに入ってるんだ？！

運よく、避けて俺は姫香を見た。

「つつおいしい！！！」

姫香の行動を見て思わず、ツツコンでしまった。

なぜなら、俺の事をまったくみずに、壁の方へ向かって行っている。もしかして、俺は見殺しか？！

そうこうしていると、優男がまた拳を振り上げてやがる。

とりあえず俺は後ろに飛んで距離をとる。

「くそっ！！どうやって、勝てば良いんだ？！」

思わず口から愚痴がこぼれた、その言葉を聞いて優男^{シユウ}の眉間にさら

にスジが浮かぶ。

「貴様！！この僕の前で、『糞』などという言葉を使いやがってええええ！！」

つて、ええええ？！これって禁止ワードかよ！！

こついうのは先に言ってくれ、頼む！！

そのとき、ある考えが浮かぶ。優男は美しい物が好きで、美しくない物は大嫌い。

俺の感が正しければ、こいつは自己愛者いわゆるナルシストって奴だ。

なら、自分が美しくないと気がすまないはずだ！！

「落ち着いて！！せつかくの顔が台無しになりますよ！！」

「なに？！」

優男は驚きの声を上げた。そして、急いで手鏡を取り出した。

「ホントだ・・・この僕が美しくなくなってる！！ダメだ、ダメだ！！急いで直さなければ！！」

どうやら俺の読みは当たった見たいだ。

優男は手鏡の前でセットを直し始めてやがる。

個人的にはセットの前に、ファッションセンスって奴を治すべきだと思っぜ。

さて、この隙に一旦逃げるねえと今の俺らじゃ倒せない。

俺はとりあえず壁に寄りかかっている姫香の元へ走っていった。

距離的には、そこそこあったがどうにか優男が追ってくる前に追いついた。

「おい！姫香。大丈夫な・・・のか？」

姫香を見ると、顔が青白い、しかも震えてる。

「どうしたんだ？」

心配になって聞いてみると、姫香は首を横に振ってる。

「おい！？どうしたってんだ。怖がることねえって俺だ！お前の下僕だ！！」

そこまで言っつて、姫香が俺の顔を見る。

「け・・・んた？」

「ああ。俺だ！！優男なら、今自分の顔をセツトしなおしてる。今のうちに、一旦逃げるぞ！」

俺が叫ぶと、姫香は小さく頷いた。よし！じゃあ、今のうちに逃げるぞ！

俺は姫香の手を引いて、入ってきたドアへ向かっていこうとした。

急に腹部に激痛が走った。

そして、浮遊感。あれだ、柔道で技を食らって投げられた時のような感じだ・・・だが、これは柔道じゃない。

地面は硬い、俺は思いつきり地面に叩きつけられた。

「ぐはっ?!」

意識が飛びそうになる、だが、今回はまだ意識を暗闇に落とすわけにはいかない。

俺が前を見ると、あの優男が立っている。

「貴様。お嬢様の手に触れるとは一体どういうことだ？」

優男は俺を睨みながら言う。優男の後ろを見ると、姫香がまた壁に寄りかかっている。

やっと、俺にも理解できた。どうやら、俺は優男に殴られ吹っ飛んだみたいだ。

しかし、こいつ優男のくせに能力が異常すぎる・・・。さすがは、四天王って事か・・・

「おい、答える。何故触った？」

そろそろ答えなきゃやばそうな気がして、俺は答える。

「簡単な話だ。あいつを連れてここから逃げるためだ」

「何を言っている、ここから逃げたければ僕を倒せ、そうしなければ逃げられないぞ」

「何言ってる。別にこの独房から脱出するわけじゃない、お前から逃げるだけだ。それなら、逃げられるだろ？」

俺は優男と話しながら、姫香に必死に逃げるとジェスチャーを送っ

ていた。

だが、姫香は首を横に振るばかり……。くそ！これじゃ、どっちも逃げられねーぞ！！

俺は前より大げさなジェスチャーを姫香に送った、しかし、姫香は動かない。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ。お嬢様を汚したことになる。変わりない、消え去れ。」

優男はそう言って拳を振り上げる。

やべえ……。体がうごかぬ……。はは……。

俺はあきらめて目をつぶった、ビュッと空を裂く音がしたが拳は俺に当たらなかった。

俺の前に、姫香が立ち下がったからだ。

「おい！！姫香！なんで、逃げなかった！！？」

目の前に立ちふさがる姫香に叫ぶ。すると姫香は俺のほうを向いて言う。

「主人を下僕が守るなら。主人も下僕を守らないといけない」

震えながら姫香は言う。

どこまでも、正直じゃない奴だ……。

俺を守ってくれるって言ってるんだろ、回りくどい言い方しなくてもいいのにな。

そう思うと俺は何故だか笑ってしまった。決してバカにした笑いじゃない、なんとゆうか温かい何かを感じたんだ。こんな状況なんだがな……。

俺はその温かみのおかげでどうにか立ち上がろうと試みる。

「立たなくて良い！！！」

姫香はそれを止めようと叫ぶが、俺は聞かず立ち上がる。そして、姫香の肩を持って後ろに引き寄せる。

「女に守られるのは、悪いが俺のプライドが許さない。ってことで、お姫様は後ろに座ってろ」

そう言って、姫香を軽く押す。しかし、そのわずかな力でも姫香は

しりもちをついた。

足が震えて力が入ってなかったんだろう。

「よし、俺も決めたよ。やれるところまでとことんやってやる!!」
そう言つて優男に宣戦布告しようと、顔を上げたら……。

優男が泣いてる?!

「うう……美しい……。互いが、互いを思いやる姿……あ
あ……なんて美しい……。うう……。」

俺は空いた口がふさがらない……。

「うう。間違つていた、僕は間違つていたんだ!! 美しい物は
消し去るんじゃない!! 磨いても美しい物にすれば良いんだ!! そ
うだ! そうなんだあああああ!!!!!!」

勝手に納得して、勝手に絶叫を始める、^{シユウ}優男。

そして、服のポケットからドアの鍵を取り出した。

「さあ……。君達にコレを授けるよ……。」

そう言つて優男はおれに鍵を渡す。そして、地面に崩れ落ちる。

「え? あのか? え? えええ? ? ? !」

とりあえず、状況が分からない。誰か説明してくれ……。

俺がうるたえていると、姫香は立ち上がり俺から鍵を奪い取る。

「儲け物。さあ、早く行くぞ。」

そう言つて姫香は俺を置いて歩いていこうとする。

つて、お前はさっきまでのあの会話は恥かしくないのか! ?

ちよ! なんだよ!! 俺だけかよ? 恥かしいのは俺だけかよ!! ねえ
!! ! ?

そのとき、姫香が何かをポツリと言った。

「ちよつと……。かつこよかった……。ゾ……。」

うーん。全然聞こえない……。

まあ、良いか。聞こえなくちゃいけないことなら、あいつは俺の目
の前で言つだろう。

できることなら、そのときに少し音量を考えてほしいもんだね。

さて、俺もあいつの後を……

「チョット待って下さい!!」優男が叫んだ。

「なんだ、今更鍵を返せなんて事は聞かないからな……」

俺は振り向きながら言った。

「僕に君達の手助けをさせてくれ!!」

優男が土下座をしながら叫んでやる。

「頼む。君達の美しき絆を守りたいんだ。頼む!!」

何度も、『頼む』と繰り返すシュウに俺は言った。

「じゃあ、一つ言う事を聞け。ちよつとこつちに来い」

俺は手招きをする。すると、シュウはすぐに俺の前に来る。

そして、シュウをしゃがませ、俺もしゃがみ、姫かに聞こえないように細心の注意を払って言った。

「あいつに謝れ」

シュウは「はい?」と聞き返す。

「だから、あいつはお前を見て、怯えていたんだ。酷い事をしたんじゃないのか? だったら、あいつに謝れ。そうしたら仲間に入れてやる」

なんで、こんな事を言うかって?

さっき怯えていた姫香がなんだか可愛そうだったからってのは内緒だ。

それに、どっちにしろ姫香がこいつを怖がるのであれば仲間にしても意味がないしな。

シュウは少し考えるしぐさをして、すっと立ち上がった。

「分かったよ。彼女に謝ってくる」

シュウは優雅な動きで姫香のもとへ向かっていく。

そうそう。きちんと謝ってこいよ。

俺も立ち上がり、シュウがどうやって謝るか見ることにする。

まずは、地面に手をつきお決まりの謝罪のポーズ。

そして、頭を下げて、謝罪をする。

「お嬢様！！あなたの嫌いなおからを無理やり食べさせようとして、申し訳ございませんでした！！！！！！」

そうそう・・・嫌いなおからを食べさせ・・・って・・・。

「もしかして、お前がした酷いことってそれだけ！！！！？」

シユウは俺の叫びを聞いて、立ち上がり、『はい』と答えた。

「なんだよ！！そんなわけないだろ！！？なあ！！姫香・・・？」

姫香を見る・・・震えてる、顔も青白い・・・。

さつきと同じ症状が出る。あれ、もしかしてご名答なのか？

「おい、姫香・・・。まさか、本当に“おから”が嫌いって事はないよ・・・な？」

そつと小さく、ささやくように、姫香の近くで聞いてみた・・・ら・・・。

「黙れええええええええええ！！！！！！」

絶叫とともに、顔面にパンチを食らった。

俺はお約束のように地面に叩きつけられる。

「げはっ・・・。」

するとシユウが姫香に歩み寄っていき、言う。

「ダメですよ！！お嬢さまがそんな言葉遣いをしては！！もつと上品に！！もつと華麗に！！もつと美しく！！！！！！」

「黙れええええええええええ！！！！！！」

シユウも俺と同じように殴られ空中を舞う。

そして、俺の隣に叩きつけられる。

「ぐふう・・・。美しい・・・お嬢様のパンチの軌道いつ見ても美しい・・・がはっ」

最後まで美しさについて語ってシユウは散った。

しかし、反応を見る限り・・・本当に苦手なようだ・・・。

「いやだ！おから、なんて！！！！いやああああああ！！！！あんなこわごわして、もふもふして、食感がなんだか変で！！何より味！！あの味が嫌！！！！」

姫香は一心不乱に動き回り、絶叫する。広い部屋の中に姫香の絶叫がこだましていた。

そこで、俺はある事を思い出す。

それは今日の朝食。俺は確か何故だか冷蔵庫に入っていたおからを使つて、ケーキを作った。だが、姫香は普通に喜んで『まずい』と繰り返していたが、食べてたはずだが・・・？

俺は起き上がり、暴れまわる姫香の近くに行つて、今日は朝おからを食べた事を教えた。

やっぱり・・・殴られた。

いや、実際はパンチではないかもしれん。ただ、コンボが早すぎて俺の目にはまったく映らなかったのだ。

また地面に叩きつけられる。

「いやあああああああああああ！！！！！！！！！！」

姫香は絶叫しながら、次の部屋へ繋がるドアの鍵を開け、飛び出していった。

なんだ、鍵を使つたりはできるのか。何にもできないお姫様かと思つていたから安心したよ。

つて、早くあいつを追いかけないと！

俺はすばやく起き上がり、先を走つていった姫香の後を追いかけていく。

ちなみに、シュウは・・・復活して俺の隣をぴつたり同じ速度で走つてやがる。

「てめえはあそこでやられたんじゃないのかよ？」

隣を走るダサダサ優男に問いかける。

「ははは。美しい物はいつでも復活するのさあ！そう、この僕のようにな！！！」

立ち止まって、クルンと回転して、決めポーズをするシュウ。

ちなみに、俺はこいつのきめポーズを見てすぐ走り出していた。

おいていこうがかまわん。こんな変な奴を何故仲間にしたのだろう

か・・・・・・・・。

今更になつてちよつと後悔だ。

最初は見えてなかつた姫香の背中がだんだんと見えてきて、やつと追いついた。

そこで俺は姫香にある質問をする。

「ところで、姫香。何故お前はあいつが切れた時、あんなに怯えていたんだ？」

「だって、昔の事を思い出したから・・・・・・・・。」

「昔のこと？」

「あいつに“おから”を無理やり食べさせられた記憶。そのときもあいつはさつきみたいにキレてて、フラッシュバックみたいなのがおきたか・・ら。」

「そうかい・・・・・・・・。」

「でも・・ああ！！口にしてしまった！！口にしてしまった！！あの食べ物のを！！いや、あれはきつと食べ物じゃないんだ！呪いの道具なんだ！！」

俺はそう言つて自分に自己暗示をかける姫香を見て、隣でやれやれと首を振つた。

そつえば、なんで優男の部屋に鏡があんなにあつたんだろうか？
まあ・・・・・・・・大方予想はつくがな・・・・・・・・。

第6話 ナルシストとキザくさい（後書き）

やっと、書き終わった・・・。

でも、何か変な気がする。

いや今の自分にできることはしたぜい！！（え

さて、何故こんなに間が空いたかというと、夏休みがラストスパ
トだからです。

宿題が終わってないのです。

ほかに理由はありません（え

いや、別に他にも小説かいてるわけじゃないですよ！

ここまで読んでくださり、感謝です。

ご感想＆評価お願いします。

指摘、アドバイスなどもお待ちしてます。

最初は鏡を使って、シュウを倒すはずだったのに・・・

では、失礼します。

第7話 同族嫌悪

現在、俺、もとい、姫香パーティーは三番目の四天王のいる部屋へ向かっていた。

ちなみに、姫香パーティーのメンバーは。

自己中心・他力本願・お姫様の柊姫香。

唯一の常識人・普通の高校生、俺、坂元健太。

自己愛者・優男・美しい物大好き・スーパードナルシストのシュウ。
本名は知らん。

と、以上の少数メンバーで姫香パーティーが構成されている。

そして、俺の隣でにこやかに微笑みながら優男シュウが何か話してる。

さつきまで、ずっと無視してたんで話の文脈は分からんが……。

「うん。良く見てみると君も美しいよ。」

ぞくう、と俺の背中に悪寒が走った。走りまくった……聞かなく
きやよかった……。

「やっぱり、あれだけ美しいことができる人物は何をしても美しい
んだねえ……はあ」

また俺に悪寒が走る。しかも、だんだん俺に擦り寄ってきやがる。

「おい、離れろ！気持ち悪いんだよ！！」

擦り寄ってくる優男を俺は押しのける。

「おい！姫香！！こいつをどうにかしろ！！」

俺は前を歩いている、姫香に話しかける。

姫かは振り返って首をかしげて不思議そうに言う。

「なぜ、私が下僕のために動かなければいけない？」

くそ！やっぱりこいつは俺ひとのためには動かない奴か！！

優男が姫香の言葉を聞いて、俺から離れて姫香のほうへ行く。

「こら。お嬢様！そんな言葉遣いはダメです。」

言われて姫香は「ああ」と適当に返してる。

しかし、優男シュウはあの戦いの時のような一面があるとは到底思えない・

・。

今のこいつを見ると、あの戦いが嘘のようだ。
だが、今それ以上に気なるのが・・・

俺は思いつきり殴られたつてのに、いつ間にか傷が治ってやがる・
・何故だ？

そんな素朴な疑問を考えながら歩いていると、前を歩いていた二人
が立ち止まった。

どうやら、新たな四天王の部屋へ繋がるドアの前に着いたようだ。

二人ともドアを見つめて動かない、ドアを開けようとしなない・・・

「おい。早くあける」

姫香はやはり自分でドアを開ける気は毛頭内らしく、俺に命令する。
やれやれ・・・やっぱり俺がうごかなくちゃいけないのか・・・

つてか、後ろにいる俺より、隣にいる優男そいつにやらせれば良いだろ。

「お前に開けさせなくては意味がないだろ」

そこにどんな意味があるのか、ぜひ教えてくれ。

俺は少し急いで動いてドアの前まで行き、ドアを開けた。

今回の部屋も前回、前々回と同じ造りのようだ。

が、しかし。今回の部屋においてあるのは、筋トレ用の道具だった。

「ふう・・・。ここはいつ来ても美しくない・・・」

優男シユウが遠くを睨みながら言う。

「ふはははは。貴様が脱獄囚か？そして、裏切り者の“美のシユウ
”よ！」

優男の睨んでいた方に大きな影が映る。

その姿を見て、俺と姫香は思わず言葉を失った。

影の正体は、ボディビルダーのように筋肉で固められた体の大男だ
った。

正直、いきなりこんな奴が目の前に現れると言葉を失ってしまう。

すると、大男は俺と姫香を見て言った。

「どうした、俺様の筋肉の美しさに言葉も出ないか？はははは！！
！」

一体こいつは何を言ってるんだ？

どなたかこいつに『同族嫌悪』って言葉を教えてあげてくれ。

どんどん優男へのツッコミが生まれてくる、そんな時、大男が言った。

そして、こっちの筋肉バカは空気を読まずにお馴染みのボディビルダーのポーズをして迫ってきてる。

迫ってきている大男に姫香が怒鳴った。

うれしそうに笑いながら、優男は言う。

「ふん。俺のこの筋肉の美しさが分からないのはお子様だけだ」

「ふん。そんなことはどうだって良い。私は早く先に進みたいんだ。」

姫香が筋肉さんに命令する、すると筋肉さんが高笑いを始めた。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

「おい。せつかく隠したのに、場所を教えてしまつて良いのか？」
ごもつともな正論だな。もしかして、こいつはバカなのか？」

「この男は頭の中まで筋肉でできてるからね。バカなんだよ」
優男が肯定してくれた、うん、やっぱりか。

「まあ良い。早速、探すぞ。健太ついて来い」

そう言つて姫香が筋肉さんに教えられた場所へ向かおうと走り出す。
俺もその後をついていく。あれ？こいつが俺に名前を呼ぶのは初めてじゃないか？どんな心変わりがあったのやら・・・。

そんな事を思つていたとき、俺と姫香の目の前に筋肉さんが立ちふさがった。

「ちよつとしたミスでお前らに隠し場所を教えてしまつたが、そこへ行かせなければ問題はない！！よつて、貴様らは吹き飛べ！」
叫びながら筋肉さんは拳を振り上げる。つて、実況してる場合じゃねえぞ。避けねーと。

俺は姫香を掴んで横に飛ぶ。

良い音を立てて俺達が立つていた地面が砕け散る。

あそこにたつていたままだと確実に死んでたぞ・・・おい。

そんな事を考えていると、俺の顔面に激痛と衝撃が・・・。

「いつてえ！！なんだよ？！」

「“なんだよ”じゃないだろ？何、勝手に私に触れている」

「触れているつて、あのままだつたら危なかつたから、俺が助けたんだろぅが！？」

予想通り俺を殴つたのは姫香だった。

「お前なんかに助けられなくても、私は大丈夫だ」

こいつは感謝つて言葉を知らないのだろうか？

「何を立ち止まつている！！？俺の筋肉の餌食になりたいのか！？」
振り返ると筋肉さんが、また拳を振り上げてる。

くそ！今度は避けられないぞ！？

俺は思わず目をつぶった。

一向に衝撃が来ない・・・俺は恐る恐る目を開けてみた。

目の前には優男が立って、その筋肉さんの拳を止めていた。

「こいつは、貴方達では少し厳しいでしょう。ですので、ここは僕が足止めますので、貴方達は先に鍵をお探しください。」
そう言って優男^{シュウ}は笑った。

「おい。お前・・・本当に大丈夫なのか？」

「ええ。この四天王の力は大抵同じ。ですので、僕でも十分ですよ。そ・れ・に、せつかく見つけた美しいものに傷をつけたくない
ので。」

そう言って、優男はウィンクをする。

「分かったよ。じゃあ、その筋肉さんはお前に任せるぜ！」

それだけ言って、俺は姫香の手を掴み、目的の場所へ走っていく。
急に掴まれた姫香は、何だか怒っているがここでまたタイムロスするの面倒なんで無視することにする。
ちよつと心配になつて後ろを振り返る。

「うわー!!」

思わず声が出た。なぜなら後わずかで姫香に拳が当たるところだったのだ。

だが、刹那の差って奴で、その拳を優男が蹴り飛ばしてくれていた。
よし、じゃあ俺達はさっさと鍵を見つけることにするか。

第7話 同族嫌悪（後書き）

短いですw

いつもより、かなり短いです。

いろいろあつて忙しいのです（言い訳

ですので、今回はこんな微妙な位置で終わらせてもらってます。

ご感想&評価お待ちしております。

ここまで読んで下さり感謝です。

では、失礼します。

第8話 ホラーなものは見ないに限る

さて、鍵を探し始めて数分がたった頃だろうか……。

俺と姫香は現在、次の部屋へつながるドアの前で古箱の中を見つめながらうなっている。

「おい。どれが、次の部屋への鍵だ？」

「さあな。俺には想像つかん」

「お前は役立たない」

そういつて姫香はプイと顔を向ける向きを変える。

誰が役にたたんか……。お前もわからんのだから、同じ穴のムジナって奴だろうが。

顔を背ける姫香から目を動かし、後ろを見る。

そこでは、優男シユウと四天王の筋肉さん（名乗ってもらってないから名前がわからん）が人間離れた動きで戦ってる。

うん……。俺には踏み込めん領域だな。改めて実感するよ。

そのとき、俺の頬に冷たくて固い物質が思いつきりあたる。

「いてえ！！」

あたった物体は地面に落ちて、カランカランと音を立てる。どうやら、姫香が俺に向かって箱の中にある鍵をぶん投げたようだ。

顔を上げると、姫香が仁王立ちしている。

「いい方法を思いついた。協力しろ」

命令口調で上から俺を見下ろしながら姫香は言う。

「んだよ……。何を協力しろってんだ？」

「簡単な事だ。この箱に入っている、鍵をすべてこの鍵穴につっこみ開くかを調べる、あかなければ次の鍵をつっこむ。協力しろ」

「なんとなく、返事が予想できるが……。一応聞こう。それをやる

のは誰だ？」

「お前」

姫香は間をあけず、即答する。やっぱりか……。

ここに辞書があれば『協力』をひいて、その意味を暗記するまで覚えこませてやりたいくらいだ。

だがしかし、命令は聞いてないと俺の命が危ないし……。鍵が詰め込まれた古箱の前まで行き、座り込んで適当に鍵を引っ張り出し鍵穴に突っ込んでまわす。開かない……。違うとわかった鍵は箱の外に放り投げていく……。

そんな時、目の前に姫香が座り込んだ。

「ん、どうした？」

俺の質問を無視し姫香も古箱に手を突っ込み、鍵を取り出し鍵穴に突っ込んでいる。

「暇……。だから……。私も手伝うことにする……。別にお前のためじゃない……」

いつもと比べると小さな声で、姫香が言った。

なんだ、協力の意味……。わかってるじゃないか……。

さっきの言葉は訂正しなきゃいかな……。。

というわけで、鍵探しを二人で協力し開始する。

古箱の中の鍵も残りわずかになっていた……。

俺ふと優男＆筋肉さんの方を見た。

相変わらず、人間離れた戦いを繰り返している……。

時折聞こえてくる変な趣味の会話が俺の集中力を奪っていく……。

「ははは！この美しい筋肉を目に焼き付けるがいい！！！」

「キミの筋肉が美しい？何寝言を言っているんだい！僕の方が美しいに決まっているだろ！そして、僕以上に美しいのがあの二人だ！！！」

俺は顔＆意識を古箱に戻すことにする……。

あいつらの声がなるべく聞こえないようにするために。

顔を戻そうとしたとき、俺の頬に固くて冷たいものが勢いよくあたった……。

「いたっ！！？」

またしても、姫香が俺に向かって鍵を投げてきていた。

「余所見をするな……。早くする」

そういわれて箱の中を見ると、残っている鍵が二つになっていた。

俺が余所見をしている間に姫香が終わらせたようだ……。

「ああ、悪い。じゃあ、残りは俺があける」

箱の中にさびしく残った二つの鍵を手にとって、俺は右手の鍵から鍵穴に差し込む。

開かない……。まあ、いい。こっちの鍵があたりってことだろ。

俺は左手の鍵も使ってみる……。しかし……。

「開かない！！」思わず叫んでしまった。

最後の鍵のはずなのに、左手に握られる鍵では開かなかった。

「なんだと？なぜ開かない？！」

俺の言葉を聞いて姫香も叫ぶ。

そのとき、戦っていた筋肉さんの動きが止まった。

そして、今更なことを言う……。

「あ！鍵ならここにあったぞ！！」

俺、姫香、優男の口があんぐり広がって、閉じなくなる……。。

「はははは！すまなかった！隠したつもりだったんだが、俺が持っていた！！」

筋肉さんはそういつて、ウィンク。そして頭にこつんと手をあて下をちらと出す。

俺の中には腹立たしいという感情よりも、気持ち悪いものを見た後の恐怖の感情のほうが強く浮かんていた。

なぜなら、筋肉さんの行ったドジっこモーションがとてつもなくホラーな出来だったからだ。

あれは、どこぞの美術館に保存されてるホラー映画より怖いぞ？！しかも、筋肉さんは何を思ったのかそのモーションのまま静止してる……。やめてくれ……。

俺はそのホラーな静止人物から目をそらし優男のほうを見る。

優男も静止していた、しかし、見ている方向は……俺の隣。俺はゆっくりとなりを見てみる、隣に立つお姫様を……。

震えていた……。怒りでわなわなと震えていた……。そうしか考えられない。

なぜなら、背中から怒りのオーラが噴出していたからだ。

声をかけようとしたとき、姫香が走り出す……。手には近くにあったサンドバックを持って。

あんなもん持った状態であそこまで早く走れることに俺は驚きを隠せない。

そのまま、高速で筋肉さんの前まで走った姫香はサンドバックをバツトのように構える。

思わず見とれていた俺は、はっとする。

「筋肉さん逃げろ！！下手すりゃ死ぬぞ！！？」

叫んだときはとき遅く、姫香の持ったサンドバックが見事なテークバックの後筋肉さんの体に直撃していた。

「げばあ?!」

筋肉さんが弱弱い叫び声をあげて吹き飛んでいく。

俺と優男は筋肉さんの末路を無言のまま見守った……。ご愁傷様です。

俺はすっかり忘れていたんだ、姫香の怪力を……。

筋肉さんの持っていた鍵はいつの間にか姫香が持っていた。

そして……。

「よし。じゃあ、先に進む」

姫香は手を『おー』と突き出し珍しく自分でドアを開けて進んでいく。

その後を俺と優男が無言でついていく。

ドアが閉まる少しの間に俺は部屋の片隅に無残に転がる筋肉さんに手を合わせるのだった。

ちなみに、優男曰く、筋肉さんは“力のゲンザブロウ”というんだ

そ
う
だ。

第8話 ホラーなものは見ないに限る（後書き）

間が開きすぎました。

すいません。

本業が始まってしまったため中々更新ができなくなってきました。
今後は更新が土日集中しそうです。

本当ならもつと筋肉さんをあれなキャラにしたかったですかね・
・。

なんだか、弱いキャラになってしまったことが残念ですね・・。

ここまで読んでくださった方々、感謝です。

ご感想＆評価お待ちしております。

では、失礼します。

第9話 何かに入るときは規約をきちんと読もう

しかし、あほ四天王達を見ていると、俺の置かれている状況がわからなくなってしまう。

まあ、でも。今の状況は見事に俺が置かれている状況を知らしめてくれたよ。はは。

今現在俺は、大勢の顔の怖いおじさん、お兄さんに追いかけられている。

なんで、こうなったかだって？

おいおいおい、この状況で俺に説明しろと、馬鹿いつちやいけないよ！

こんな状況で、回想なんてできるかあああ！！

だが、優しい俺がとつてもわかりやすく短く回想してやる。感謝しろ。

筋肉さんの部屋から出た俺たちは、まっすぐ続く道を進んでいた。

そして、かなり歩いた頃、目の前に分かれ道が現れたんだ。

「おい。どっちが正解だ？」

「あ？俺が知るかよ……。おい、シュウ、お前は？」

「うーん……。僕の美しさリーダーではこっちで反応があるよ」

優男のシュウがわけのわからんリーダーで得た情報を教えてくれる。

「じゃあ、こっちに行く」

そういつて姫香は優男シュウの行った方向へ歩き出す。

そのとき、前方から……。大勢の顔の怖いおじさん&お兄さんが走ってきたんだ。

「な……。！？なんだ？！」

俺たちは一瞬言葉を失い固まったが、すぐさまわれに戻り、振り返ってもうダッシュを開始した。

「おい！シユウ。なんで、追っ手がこんなところにいる？！」

「おそらく、僕たちの美しき快進撃に組長がお怒りになられたのでしょう！」

姫香と優男の話を隣で聞きながら走っていると、目の前にまた分かれ道が現れた。

俺は思わず右へ、そして姫香＆シユウは左へ。

「な！おい！！健太！！どこに行く？！」

俺が別の道に入ったことに気がついた姫香が叫ぶが、俺は立ち止まれない。

「姫香！！後で必ず落ち合おう！！だから、お前はそいつと逃げ回ってろ！！」

と、かつこよく言っただけ分かれたのだが……。

逃げ回るのは俺のほうだった。

あの後からついてきた大勢のおじさん＆お兄さんは見事に左には行かず、右に曲がり俺を追いかけてきてるわけだ。

よし、回想終わりだ！！

「おらー！！！！またんかい！？貴様がゲンザブロウさんをあんなにした張本人やろうがああ！！！！！」

俺の後方からドスの聞いた怒声が聞こえてくる。

くそ、思わず泣きそうになるぞ？！俺は普通の高校生なんだぞ？！それに、筋肉さんをあんな目にあわせたのは俺じゃなくて、姫香だつての！

「またんかいー！！！」

だが、今はそんなことを言ってる場合じゃない。

どうにかして、こいつらをまかないと……。

俺は回りに何か助かる手立てはないかを探した。くそ、ない。

今度もまた曲がり道が現れた。俺が勢いよく曲がり道を回った。そのとき、あるものが目に入った。

あれは使えるぞ!!!

俺は急いで、あるものに近づいた・・・。

ドタドタと騒がしく足音を立てて、目の前をおじさん&お兄さんたちがとおり過ぎていく。

どうやら、成功したみたいだな・・・。

おもわずほっと息を漏らした。

どうやって、隠れたかって？

簡単さ。曲がり道を曲がったとき、そこにあるドアがあつたんだ。

で、そのドアに飛び込んでちょうど開いてる隙間から外を見ていたわけだ。

しかし、こんなに簡単に巻いてしまえるとは、ここの施設の人間たちはみんな馬鹿なのだろうか・・・？

そのとき、俺の背後から突然声が聞こえた。

「あのー？」

「うわああああ!!!」

俺は大声で叫びながら、ドアを背中を開き、通路に飛び出す。

飛び出した部屋から、パタパタと足音が聞こえて少女が姿をあらわす。

少しパーマがかかったショートヘア、すらっとした体形だが、出る所は出てる。

姫香が綺麗だというなら、この子はかわいいだろうか？

「あの、大丈夫ですか？」

その少女は心配そうに見下ろしながら聞く。

すぐに立ち上がって、大丈夫と答える。

「よかったです。あの、もしかしてあなたが怪しいと騒がれている、お方ですか？」

はっ?!

そう言われ、俺は身構え周りを見渡す。

そうだ、そうだった。

現在俺は脱獄した奴として狙われてる身だった。

だが、ここで否定しても俺にいい結果をもたらすだろうか？

だとすれば、ここは本当のことを言うべきか？

見た感じ、この少女は顔の怖いおじさんたちの仲間じゃなさそうだし……

「ああ。きつと、君が言っている奴は俺だ」

考えた結果俺は本当のことを言うことにした。

さて、どういった反応が返ってくる？

俺は少し身構えながら少女の返事を待った。

「じゃあ、私と同じですね！ふふ」

少女はフワッとやさしくうれしそうに笑っていた。

ん？同じ？

「はい。私はこの施設の調査を任されて進入した者なんです」

少女はそういつて話し始めた。

まあ、この子の話を手っ取り早くまとめると……。

彼女の所属する組織にこの施設の調査を命令され、命令に従い現在進行形で調査を進めている、とのことである。

っていうか、組織ってなんだ？

ここにきてまた俺を普通から引き離そうってのか？

「で、キミの所属する組織の名前は？」

「えーつと……IBTです！！」

少女はにこつと笑って、どこかから取り出した書類を見て答える。

「えーつと……それは何の略称なんだ？」

「わかりません！」

今度もにつこり笑って答えてくれた。って、おい！なんで組織の正式名称しらねーんだ？！

「キミって本当にその組織に入ってるのか？」

さっきまでの答えを聞いて少し疑わしくなり聞いてみた。

「もちろんですよ！だって、ほら！さっき私の隣にこれが置いてあ

「つたんですから!!」

そういつて少女はさつき取り出した書類を俺に突きつけてくる。

『おめでとう!坂上麗華さん。さかがみれいかキミはこの組織『IBT』の一員に選ばれたのだ!というわけで早速君に任務を与えよう!』

現在君のいる組織を調査してくれ!一緒に入っている地図に記録してくれ。じゃあ、頼んだぞ!』

さかがみれいか坂上麗華さかがみれいかつてのは、この子の名前なんだろうか・・・?

つていうか、全部目を通して思うが・・・嘘くせえ!!

これを信じる奴なんていないだろ・・・

いる!俺の隣にいる。この子はきつとこれを信じてるんだ。よし、目を覚まさせてやろう。

「あのー坂上さん。あなたはきつとたまされてるぞ?」

「な・・・なんで、私の名前を知ってるんですか?!」

坂上さんが驚きの声を上げる。

「いや、あなたが見せた書類にかかれてたけど?」

勘違いしてるようなので、とりあえず言ってみたが・・・。

「も・・・もしかして・・・あなたはストーカー?」

聞く耳もたず。俺からじりじりと離れていく。

「いや、俺はストーカーじゃないつて!だから、あなたが俺に突き出した書類に書かれていたんだつて!!」

そういうと、彼女は自分の持つている書類をもう一度見て。

「あ、本当だ!ごめんなさい。私が勘違いしてました、本当にすいません。」

そういつて坂上さんはぺこぺこ頭を下げる。

「いや、別にいいよ。勘違いだったとわかったし」

俺は頭を下げ続ける彼女に言つて、それをやめさせる。

ふう。しかし、この子と一緒にいるとなんだか和むなあ・・・。

姫香は命令かしないもんな・・・。ん?姫香?

「忘れてたああああああ!!!!!!」

思い出した。こんなところで和んでいる場合じゃなかった!!

俺は姫香と一緒に脱出真つ最中だったんだ。
俺が急に大声を出したもんだから、坂上さんは驚き、隣で震えている。

「あ．．．あのー．．．。何を忘れていたのですか．．．？」
震えながら恐る恐る聞いてくる。

「あ、いや、ごめん。実は俺、仲間とはぐれたんだ。それで、ある場所で落ち合う予定だったんだ。」

「そうだったのですか。じゃあ、私に任せてください」
そういつて坂上さんは得意げに胸を張った。

「え？任せるって？」

聞き返すと坂上さんはかわいく「ふふふ」と笑って。

「私はね、この施設の調査を任されているのです！そして、その調査結果を記入するために地図も渡されているですよ！！」

おお。なるほど！

「ってことは、最後の四天王の部屋はわかるわけか？！」

俺は少し興奮して聞いた、すると。

「もちろんですよ。早速案内します！」

そういつて坂上さんは歩き始める。

よかった、これで簡単に四天王の部屋について姫香と落ち合えるぜ。
姫香のほうがつり着いてない可能性があるが、まあ、優男^{シュウ}がついているし大丈夫だろ。

俺は前を歩く坂上さんのあとをついていくのだった．．．。

．．．．．。

「なあ．．．ここじゃないだろ？」

俺は前を歩く坂上さんの背中に問いかけた。

「へ？これが最後の四天王の部屋ですよ」

坂上さんは振り返りきょんととして、首かしげる。

「いや．．．だってここ．．．」

俺は現在筋肉さんのいた部屋の前にいる。

「え？でも、地図にはここが最後の四天王になってますよ？」

そういつて坂上さんは自分の持っている地図をうなりながら見つめる
そして……。

「あ……これ逆さでした」

「おい！！！！」

「ふわつ。すみません、すみません！！」

俺が大声を出したため、坂上さんは驚いて涙目になって謝り始める。

「あ、いや、違うんだ。君が悪いわけじゃないんだ、だから謝らなくていいぞ？なあ？」

必死に慰める俺。

「本当ですか……？」

恐る恐る顔を上げて坂上さんは謝るのをやめる。

「ああ、だから。次は、な！ちゃんと最後の四天王の部屋へ頼むよ！」

そして、歩くこと数分……。

「はい、では。ここをまっすぐ行けばつきますので」

坂上さんは通路の奥を指差して言う。

「お、ありがとな。」

「はい。では、私は調査の続きを行いますので、失礼します。」

勝手に別れを告げて進もうとする坂上さんを俺は呼び止める。

彼女はきょとんとした顔で振り返る。

「えつとさ……大丈夫なのか？」

思わず出た言葉だった。

そもそも、この施設の中にどれだけ人がいるかわからない。

それに四天王みたいな奴らがその辺にいるのであれば彼女の一人歩きは危険だ。

「ええ。大丈夫です。私も、あとひとつ部屋を調査すれば終わりの
ので。それに、その部屋はとても安全な部屋です。大丈夫ですよ」
そういつて坂上さんはふわりと笑って、前を向きなおし歩き始めた。

もう一度呼び止めようとしたが、なんだか呼び止められず、俺は通路を進むことにする。

俺の心配が杞憂であってほしいねえ……。ま、確認にいければ問題ないんだが、お姫様のほうも気になるからな……。

俺は最後にもう一度振り返った。

しかし、すでに彼女の姿は消えていた……。

で、坂上さんと別れた場所から数分歩き。

俺はついに最後の四天王の部屋の前に着いた。部屋の前にはすでに姫香が立っていた。

「無事だったか……」

そういつてなんだか安心したような顔をする。

「お前もな……ん？」

優男シュウの姿がない……。

「おい、シュウはどうした？」

姫香に聞いてみた、すると……。

「あいつは、私を逃がすために男たちに向かっていった……。思わず言葉を失う……。」

「そうか……。でも、無事だよな？」

俺は自分に言い聞かせるつもりと姫香に言い聞かせるつもりで言った。

すると姫香は顔を上げて自信満々で言うのだ。

「当たり前だ！」

なんだか、こいつの言うことはなんでも本当だと思えてしまうよ。なんでだろうなあ？

「よし！最後の四天王だ。行くぞ！健太！！」

「おう！！」

こんな風にかつこよく二人で言うが、結局ドアを開けるのは俺の役目だった。

第9話 何かに入るときは規約をきちんと読もう（後書き）

やっと、更新できました・・・。

この頃は本当に忙しく全然更新する機会がなかったです・・・。

まあ、いいわけにかなりませんかねえ・・・。

今後はもっとハイピッチで書いていきたいですw

『製作裏話』

なんとなく加えた新コーナーです。

ここでは、更新した話を書くときの裏話的なものでもしてみようと思います。

こんなところに力を入れるなら本編に力を入れろって？w

おっしゃるとおりです・・・すません。

でも、やらせていただきますw

当初の予定ではこの話は健太だけで行動する。

ぶっちゃけどうでもいい話にする予定でしたw（ま、今の話もぶっちゃけどうでもいいですが）

しかし、あることを思いつき、複線としてこの話に変わりました。

何が、何の複線なのかは脱出した後にわかるはずです。

ですから、みなさん最後までよろしくw

ここまで読んでくださり感謝です。

ご感想＆評価お待ちしております。

では、失礼します。

第10話 ゴスロリ超能力者？

重い扉を、ゆっくりと開いた。

そして、俺と姫香は部屋の中に入った。

中は、前回と前々回の部屋と違いかなり殺風景で薄暗かった。部屋の壁は何もはられてないだろう、ただの石の壁だし。

地面は絨毯どころか、ただの岩だし。いや、これはそういうデザインなのかもしれん。

その中を俺と姫香は歩いていく。

「まったく、薄暗くて見え難いったらありやしない……。」

ぶつくさ文句を言う姫香と並んで歩いていると、突然、明かりがつく。

「眩しっ!!」

急についた明かりに、声を上げて思わず目を瞑ってしまう。

そして、ゆっくり目を開ける。目の前に、少女が立っていた。

見た感じ年齢は俺と同じくらいか、それ以下。

人形のように整った顔立ちに感情があまり感じられない表情、髪の毛は肩にかかる程度で切りそろえられている。

目は思わず吸い込まれそうになるようなほど、綺麗で透き通っていた。

そして、服装は、ゴスロリという奴だろうか……？

真っ黒でフリルのついたスカートをはいてるし……。

俺も詳しくはわからないのでな、親父の持っていた雑誌で見た程度だし。

目の前の少女がゆっくりと動き始める。

俺と姫香はすばやく身構える……といっても、俺は中腰になる程度だが……。

少女はその場に立ち上がって、俺たちの方へ手のひらを向ける……。

なんだ・・・？何をする気なんだ・・・。

俺も姫香も一層警戒を強める。

ヒュッと風の切れるような音が聞こえた気がした・・・。

その音のすぐ後に何かが砕けるような音が部屋に響いた。

振り返ると、俺たちの背後にあった岩の壁がへこんでいる。

・・・は？

一体、何が起きたんだ？！

「私は四天王・・・“超能力のリサ”。死にたくなかったら、今すぐ降参しなさい」

目の前の少女は吸い込まれそうな目にさつきをこめて言った。

俺は思わず後ずさる・・・。

なんだ・・・なんだ・・・こいつは、今までの四天王とどこが違う。

わかる・・・直感的にだが・・・こいつを挑発するのはやばい！！

「誰が、降参などする？ さあ！！行くぞ、下僕！」

うはははー。やっぱり、お前はそういう奴なんだなあ！！

俺の思ったことの逆を突いてくれる。『行くぞ』が『逝くぞ』に思えてくるよ・・・。

しかし、俺のことなど見向きもせずに姫香は目の前の敵^{リサ}に向かって行ってる。

「おろかね。私の力を思い知りなさい。」

リサがつぶやいたかと思うと、姫香の体がこちらに向かって飛んできた。

「なっ？！ー！」

俺は思わず飛んできた姫香の体をキャッチする。あ、軽。

「なにが、おきた？」

どうやら、飛んできた姫香自身も何が起きたかわかってないようだった。

悪いが、俺にもわからない。

「言っただでしょ？私は“超能力のリサ”。」

気がつけば、リサは俺達の目の前に立っている。

「どうやって、移動したってんだ?! 俺とこいつの距離はかなり開いてたはずだぞ？」

「さあ、早く逃げないと・・・」

俺はいやな予感を全身で感じ、姫香を抱えたまま、すばやく右にとんだ。

音を立てて、俺と姫香の居た場所の地面が異常なまでにへこむ。

「何が・・・?!」

くそ! 何がおきたってんだ?!

そのとき、リサの言葉がよみがえる。

『私は“超能力のリサ”』

もしかして、いや、これしかないだろ!

「お前・・・超能力が使えるって言うのか・・・?」

姫香は俺に抱かれたままの状態で、目を丸くしている。

「健太。何を言ってる? そんなことあるわ・・・」

「そうよ。私は超能力者よ」

姫香の言葉をさえぎってリサがいう。

「やっぱりか・・・。これで、こいつの異常な攻撃も理解できる。」

きっと、超能力の念力とかの類だろう。

「でも、わかった所で何の解決にもならないわよ」

リサが静かに言った瞬間、俺の腹部に激痛と衝撃を感じた。

「ぐふう!!」

情けない叫び声を上げ、抱き上げていた姫香を落とし、俺は後ろに飛ばされる。

ぐっ・・・勢いが強い・・・。っていうか、やばい、このままじゃ壁に激突しちまう?!

どうにか勢いを殺そうと、俺は足を伸ばし、地面と足で摩擦を起こす。

だが、わずかに勢いが弱っただけで完全には止まらない。

「がはぁ!?!」

。 結局、壁に背中を打ち付けられる。やばい・・・息ができません・・・

遠くで姫香の叫ぶ声が聞こえた。

「健太あ！！！！危ない！！」

その叫び声に反応して俺は前を向く。

大きなとがった岩が俺めがけて飛んできている！！

すぐに俺は転がって、どうにかその岩の攻撃をかわす。壁が砕け、破片が飛んでくる。

あ、いつの間にか息ができるや。

「はあ・・・はあ・・・大丈夫か！？」

姫香が俺の隣に寄ってくる。全力で走ってきたのか息切れしている。そして、その背後にはリサが立っている。

しかも、手を姫香の背中へ向けている。

「あぶねえ！！！！」

俺は痛む体を動かして、姫香を突き飛ばす。

「ぐはっ！！！！！！」

またしても俺は壁にたたきつけられる。

「残念。お嬢様を吹き飛ばすつもりが・・・」

リサは無表情だった顔を不気味にニヤつかせて言った。

その顔を見て、思わず身震いをする。そのとき、俺の体が宙に浮いた。

「な・・・？！！」

言葉を失いそうになる。だが、失うより先に俺の体が壁にたたきつけられた。

今度はうめき声すら出てこない。今度こそ意識が飛びそうになる・・・。

ぼやける目で俺は前を見る。小型の石でできた杭が俺の方へ向かってきている。

やばい、と判断して避けようとしたときには遅かった、俺の服は石の杭で見事に壁へ貼り付けられた。

「あなたは邪魔だから、そこでおとなしくしてなさい。私はゆっくりお嬢様と遊ぶから」

リサは、また不気味な笑みを浮かべた。

そして、姫香の方へ向き直る。

「さあ。私と存分に戦いましょう？ お嬢様。」

第10話 ゴスロリ超能力者？（後書き）

なんだか、微妙な部分で切ってしまってます。

しかも、短いなあ・・・？

少しお知らせがあります。

諸事情により、今後。1週間に1話のペースが遅くなりそうです。
ですが、よろしく願いしますねw

『製作裏話』

この話というより、最後の四天王。

実は、最初の四天王が登場したときより考えていたキャラクターです。

と、言っても。ゴスロリ風の少女と決まったのはついこの頃ですw

そして、こっちでも超能力者の登場でありますw

でも、『0能力者』シリーズとは違い、こっちの超能力者はぶっちゃけなんでもありな無敵キャラです（え

まあ、健太達がどんな方法で倒すのかは楽しみをw

コメディーらしい勝ち方に見ようと思います。

ここまで読んでくださり感謝です。

ご感想＆評価お待ちしております。

では、失礼します。

第11話 半裸って、上半身裸のほうなのか下半身の方かどっちだろう

えー現在の俺は身動きが取れない。

理由は簡単だ。石の杭によって服を壁に貼り付けられているからだ。どうやったかって？悪いがそれを説明するのは難しいんで省略させてもらう。

というわけで、こんな状況のため、俺は適当に解説をやらせてもらう。

そして、今。

ゴスロリ超能力少女と猪突猛進・自己中心少女の二人の戦いの火蓋が切っておろされる。

では、バトル解説開始。

向かい合っていた二人は、超ダッシュで一気に間合いを縮める。

リサの方は超能力だろうからあまり驚かんが。

姫香・・・お前は生身のはずだろ・・・？

何故、超能力者とはほぼ同じ動きができるよ、おい。

つと、こんなことを言ってる間に二人は一気に縮めた間合いを開く。何が起きた・・・？

「あらあら。お嬢様、どうしたのかしら？」

「はっ！ お前の方こそいきなり間合いを空けるのはどういこと？」

二人はにらみ合ってなにやら言葉の応酬を繰り返してる。

俺は位置が悪いため声はよく聞こえない。

すると、リサがゆっくり手を上げる。

来る！ リサの超能力が来る！！

姫香もわかつたらしくすばやく右に飛ぶ。

姫香の立っていた場所が勢い良くへこむ。

そう。これがリサの超能力だ。

原理はわからないが、とにかく、こいつが手をかざした場所には何か特別な力が働くのだ。

「上手く逃げるじゃない。」

「しゃべっていたら、舌を噛む」

リサが姫香に何かをつぶやいたとき、姫香のアップパーがリサの顎へヒットする。

不意を突かれたのかリサは勢い良く空中に浮きあがる。

丸太を振り回すほどのバカ力を持つ女のアップーを顎に喰らうのか・
・・。

下手すりゃ死ぬんじゃない？

そして、宙を舞うリサだが、さすがは超能力者。

地面にはぶつからず、4〜5メートルの高さを保って浮き上がる。

「危ない。もう少しで、気を失うところだったわ」

しかし・・・。

こうやって、この二人の非現実バトルを見ていると

俺がつい数日前まで過ごしていた、あの平凡な日常が嘘のようだぜ・
・・。

ああ．．．あの頃が懐かしい．．．。

目をつぶればあの平凡で平和な日々がよみがえって……。

そうやって目をつぶった俺の顔の横に何かが突き刺さり、すごい音をたてる。

[illegible]

「な．．．なんだ?!」

ワンテンポ遅れて、大声を出す。

何が、起きた．．．?

恐る恐る、横を見てみると、俺の服を壁に貼り付けてる石の杭と同じようなものが突き刺さってる。

「おい! 大丈夫か?!」

姫香が走り寄ってくる。

「あ．．．あの．．．姫香さん．．．これはいったい何が．．．?」

「私が避けたものがお前の隣にささった。すまん。」

おいおいおい。下手すれば俺の顔面に大きな穴が開いてたぞ?!

「お嬢様。背中がお留守ですよ?」

姫香の背後に、リサが現れ不気味な笑顔を浮かべて手をかざす。

「姫香!! よける!!!」

俺は目の前に立つ姫香に叫ぶ。しかし、姫香は動こうしない。

そして、姫香の体が右方向へ吹き飛んだ。

「ぐっ! があ?!」

姫香がうめき声を上げて転がっていく。

「あらあら。お嬢様だからよければと思っただのに．．．」

リサは不思議そうに首をかしげる。

「おい!! 姫香!! 大丈夫か?! っていうか、何でよけなかった?!」

俺は地面に転がる姫香へ叫ぶ。

姫香はゆっくり立ち上がって、一言言った。

「バカ．．．。私がよけたら．．．健太に当たるだろ?」

確かに、あの状況で姫香が避けていれば俺にあの謎の衝撃波が直撃してた。

すると、リサが俺の前に降り立つ。

「その男がそんなに大切なんですね．．．。」

リサは少し呆れたような顔をして、また無表情に戻り、にやりと不気味に笑って。

「じゃあ、こんなことすればどうかしらあ？」

え？　ちょ！　待て！！　何するきだ？！俺のほうに手を向けて！
「ぐがあは！！」

おいおいおいおい。なんだ、この威力は・・・俺は普通の高校生なんだ・・・こんな痛みに耐えられるわけじゃないか・・・。

「げげげほ・・・げえええ」

咳き込み、胃からの逆流物で口の中には苦い味が広がる。

ゆっくり顔を上げる。そこには、まだリサがたっていて俺のほうへ手のひらを向けている。

ちよつと待て・・・。おい、やめろ・・・。

「やめろ！！」

俺は思わず泣きそうになり情けない叫び声をあげる。

しかし、リサは不気味に笑って。

「いやよ」

「うぐう・・・。」

またしても体中にいろいろな衝撃と痛みが走る。

「ほらほら。お嬢様。あなたの大切な人が傷ついているけどいいのかしら？」

姫香はふらふらした足取りを元に戻し一気にリサとの間合いをつめる。

「や・め・ろおおおおおお！！！！！！」

飛びそうになる意識の中で姫香の叫び声が聞こえた。

姫香の叫び声を聞いて、飛びそうだった意識は正常になる。

そつえば、こいつも俺と同じ攻撃を受けてるんだ。

でも、あれだけ。あれだけ激しい蹴りをリサに繰り返すとは・・・。

不意を突かれたらしく、見事に姫香の蹴りがリサの顔面にヒットする。

「きゃああ！」

叫び声をあげてリサは俺の前から横方向へ吹き飛ぶ。

「はぁ．．．はぁ．．．大丈夫？」

姫香は息切れをしながら聞いてくる。

「お前こそ大丈夫か？」

俺から見れば姫香も十分大丈夫には見えないぞ．．．。

「私はいい。とにかく、お前はそこから動け。」

「無理だ。悪いがこれはずしてくれ」

そういつて、俺は服を止めている石の杭をあごです。

「しょうがない。今回だけだ。」

姫香はそういつて石の杭の取り外しに取り掛かってくれる。

ん．．．。そういえば、リサはどこへ行った？

周りを見してみる。前右方向に、空中に浮いて顔に手を当ててる．．．。

何かつぶやいてる？

「くそ．．．私の顔を蹴った．．．。許さない．．．顔蹴った」

やばい．．．確信はないが絶対にやばい！

「姫香急げ！ リサの様子がおかしい！！」

必死に杭をはずそうとしている姫香をせかす。

「うるさい！ これ異常に硬いんだ！！」

「許さない！」

リサが叫び声をあげた。

その瞬間。リサの周りにすごい風が起きる。

「な．．．？」

俺も姫香も目を丸くする。

「お前らは許さないわ．．．。私の最強の技で死になさい！」

リサは両手を振り上げる。

すると、リサの上空になにやら黒い球体が表れる。

おいおいおい。何をする気だ・・・？

「私の最強の技“黒鉄球”。喰らったものは一瞬でぺちゃんこよ・
うふふふ」

リサがわざわざ説明してくれた。ご丁寧にも。

とか、言ってる場合じゃねえ！！

「おい！ 姫香どうする？！」

「うるたえるな！ 私がどうにかする。お前はここで待ってる！！」

姫香は俺に怒鳴りつけてリサに向かっていく。

やばい。早くあいつを止めないと！

だが、どうやって・・・。ん？

そうだ！ この手がある！！

俺は全身に力を入れて前に飛び出した。

数秒後、俺はリサに向かっていった姫香を止めることに成功した。

「やめろ！ 俺は脱出できた！！」

「な？ どうやって？ ってお前！！ なんて格好してる？！」

その言葉を聞いて、空中に居たりサもこっちを見る。

「何を言ってるのか・・・きゃああ！！」

おいおい。そんな悲鳴を上げるな。

それだと俺がまるで変態じゃないか。

「何を言ってる！？ どこの世界にいきなり半裸になる男がいる？

！？」

そう。姫香の言うとおり俺の今の格好は半裸である。

さっきまで着ていた服は俺が貼り付けられていた場所に張り付いた
ままである。

「しょうがないだろ！ こうしないとお前を助けられなかったんだ
から！！」

この微妙な空気を打破するため俺は姫香に言った。
すると姫香の顔が赤くなる。

「え．．．私を助け．．．」

ふと宙を見るとリサがふらふらと動いて落下した。
なに？！！？

俺は、落下してくるリサの真下へダッシュした。
やばい、間に合わない？！

くそ！　一か八か！！　とりゃあああああ！！！！！！
俺は落下予想地点へヘッドスライディング！！

ナイスキャッチ。

俺はどうか落下してくるリサのキャッチに成功した。
うわーこいつ．．．びつくりするくらい軽いなあ．．．。
するとリサはゆっくりと目を開いた。

「あ．．．え．．．？」

「大丈夫か？」

どうやらまだ良くわかってない様子だ．．．。

「お前は、ほらさつきあの高さから．．．」

言いながら上を見た。あれ．．．？　なんだか、“黒鉄球”落下してきてないか？

「早く逃げないと、つぶれちゃうわよ．．．？」

つておおー！　いいい！！！！

それを早く言いやがれえええ！

急いでその場から動こうとするが．．．動かない。

「あ．．．そういえば、私に触れたら大抵の人は動けなくなるんだ
つた．．．。」

「なんだ、そのびつくり特殊能力は？！！？　　つていうのは、先に
言え」

くそっ？！！　　万事休すか？！！

「健太ああああああ！！！」

姫香の叫び声がすぐ遠くに聞こえる・・・ああ・・・なんだか走馬灯が見えてくるぜ。

いろんなことがあったよなあ・・・。

「ああゝゝ。う・つ・く・すいゝゝ！！！！！」

そうそうこんな風に気持ち悪い声を上げるナルシスト優男が・・・
つて。

「「シュウ?!」」

俺と姫香が同時に叫ぶ。

「美しいものは僕が守る。よって、あなた達はこの美しい僕が美しく守ってみせーっる！」

声のするほうを見ると、シュウは空中をグルグルと回転しながら一気に“黒鉄球”に激突する。

すると、俺の眼前に迫っていた“黒鉄球”がどこか別の方向へ吹き飛んでいく。

そして勢い良く壁にぶつかり、“黒鉄球”は消滅する。

スタッと音を立ててシュウが俺の近くへ着地する。

そして、髪の毛を勢い良く、キザったらしくかきあげ、白い歯を光らせ一言。

「美しい・・・」

うわ・・・気持ち悪い。

しかし、今回はこいつのおかげで助かったぜ・・・。

「大丈夫でしたか？ あなた達に傷がついたとあれば僕はどんな後悔をしたらいいやら・・・。」

そうつってクネクネ動く。

きもちわりい、勝手に後悔してしてくれ。

おっと、忘れていた。

俺は抱きっぱなしだったりサを見てみた・・・ありゃ？

気を失ってる・・・？

「ふう……。どうやら、リサはまだまだみたいですわね。」

シユウはあきれたように言って、俺の腕からリサを抱き取る。

「あ、どうする気だ？」

「僕が裏切った今この子にも危険が及びかねません。ですので、少し隠れさせてもらいます。」

え？は？何言つて？

「要するに、僕の美しい手助けはここまでしかできないんです。」
は？お前、俺たち守るって、ついさっき言わなかったか？！

「では、僕達は少し姿を隠させていただきます。ではっ！」
格好良く手を上げて、シユと音を立ててシユウは俺の司会から消え去った。

え？ってことは、こつから俺たちだけで処理しろってこと？

おいおいおい……。せつかくお助けキャラがでたってのに……。

まあ……。今更何言つてもだめ……。か。

しょうがねえ……。

俺は諦めて姫香の座り込んでいる場所へ向かっていく。

「どうした？」

「腰が抜けた」

姫香は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言った。

俺はやれやれとため息を吐き、姫香に手を差し出す。

「しょうがねえ……。ほら、つかまれ」

「う……。ああ。」

ばつが悪そうに姫香は言って俺の手をとるのだった。

第11話 半裸って、上半身裸のほうなのか下半身の方がどっちだろう（後書き）

なげえー（いろんな意味で

どうも、お久しぶりです。

ついに、というかやっと更新できましたw

個人的に、いろいろ忙しかったんです。

別サイトでの合作などもありますしね・・・。

『製作裏話』

一応、リサの終わり方も連載開始当初からうつすらと考えてました。

しかし、いざ書くとなると中々うまくあらかわせず・・・。

更新までこんなにかかってしまいました・・・。

では、ご感想&ご評価お待ちしております。

ここまで読んでくださーい感謝です。

では、失礼します。

最終話？ お姫様との大脱出 完了！

数々のアホくさい四天王達との死闘のすえ、俺たちは最後の部屋へたどり着いていた。

目の前には今までとはまったく違う、馬鹿でかい、豪勢なドアがある。

うわーお。ドアノブまでなんだか金ぴかなんですけどっ？！

「もしかして、というか確実にここが組長の部屋だよな？」

「そう、早く入るぞ。開けろ」

姫香は腕を組んで偉そうに、鼻を鳴らしてあごでドアノブを指す。

ここまで付き合っていると、さすがに命令形にも慣れてくるわけ・・・。

ああ、なれって恐ろしい・・・。

俺は言われたとおりにドアを開けた。

そこには、広い通路があって、その奥に偉そうなおじさんが座っていた。

あ、ご丁寧に三角ポットみたいなのに『組長』って書いて立ててるよ・・・。

そんな中を姫香はまったくの躊躇もなしに歩いていく。

手は出されないだろうなー、とかびくびくしながら俺も後について行く。

そして、姫香は組長の前まで言って・・・

思いつきり、胸倉を掴み上げた。

「ええ？！ ちょ！ 姫香！！ やめろ！！ おい？！！」

急いで、やめさせようとするが、姫香はやめない。

少しして、姫香が口を開いた。

「あんたのせいで・・・お母さんが苦勞してるのが分からないの？ お父さん！！」

え？ 今、なんて？ え？ オトウサン？ お父さん?? 緒等さ

ん？！

あ、そうか。組長の名前は緒等さんかぁー
って・・・・・・・・。

「えええええ？！マジで？！」

とりあえず、叫んでみることにした。

まあ、これですべて辻褄が合う、こいつがこの施設に詳しくあったのも、『お嬢様』と呼ばれていたことも・・・。

すると胸倉を掴まれていた、組長さんが口を開いた。

「ふん。あいつが苦しもうが知ったことか・・・。」

その言葉を聞いて、姫香の顔が引きつる。

「あんたねえ！！お母さんの事をなんとも思っていないわけ？！！」
姫香が必死に叫んでいる、っていうか、こいつは普段こんなしゃべり方なのか・・・。

まあ、しかし。この二人を見てみる限り、あいつは自分でこの場所に忍び込んだんだろうね・・・。

そして、あの組長さんに文句を良いに來たわけか・・・まったく、家族思いの良い奴だよ・・・。

そのとき、胸倉を掴んでいたはずの姫香の体が飛んだ。

「んな？！」

俺は思わず、手を出してその体を受け止める。その体は見た目どおりとても軽かった。

「おい！大丈夫か？！」

とりあえず受け止めた姫香に目をやった。

泣いていた、わずかな時間でも分かるほどの、高飛車で偉そうで、絶対に人前じゃ泣きそうにない姫香が泣いていた。

そのとき、俺は何故か少し頭が熱くなるのを感じた。

そして、姫香を投げた奴を睨んだ、そいつは平然と言い放った。

「私に娘なんて居ない。私がほしかったのは娘なんかじゃない、息子だ。」

目の前で泣きじゃくる娘に『いらない』と言い放った。

その瞬間俺は我を忘れて、目の前の馬鹿な親に殴りかかろうとしていた。

しかし、その手は届かず馬鹿な親に止められた。

「私に殴りかかろうとするとは良い度胸じゃないか……。」「

そう言つて、俺を殴り飛ばした。

やっぱり普通の高校生と組長じゃ踏んだ場数が違うか・

だけど、コレだけは言わないと気がすまない！！

「今から言つことをよく聞け！ この馬鹿野郎！！」

そう言つて、目の前に居る組長を指差す。

「娘が良いとか、息子が良いとか。そんなくだらねえ事をいつてんじゃねえぞ！！ 自分の子供だろうが！！ 貰った命を大切にしがれ！！」

「ふん。偉そうに言つたところでお前は売られたんだぞ？」

「ああ。そうかもしれないな！ でもな、俺は今でもまだあの馬鹿両親を信じてる！！」

宣言した。ああ、俺は確かにあの馬鹿両親を一度怨んだが、まだ信じている。

きつと、すぐ来てくれるとな。まあ、でも今回は先に逃げさせてもらうけど

「だからなあ・・・こんなくだらねえ事で、娘^{ひめか}を泣かすんじゃないよ！！」

俺は目の前の馬鹿野郎に言い放つた。

「私の啖呵を切るとは…。私とやりあおうつてことか？」

な？！ なんて、そうなるんだ？！

「私にあれだけ言つたんだ。その覚悟を見せてもらう・・・！」

「え！？ あ、いや！ その！！」

俺はパニくつて口がうまくまわらない。

「ほら、これを使え。」

そういつて組長が投げ渡し、地面に突き刺さるのは……日本刀。わつつ？！！？

「それを使つて、私と殺り合おうじゃないか……」
ええ??!! ちょ! その『殺り』は『戦り』の間違いじゃない
ですかぁー!!!!?」

それに、組長と普通の高校生が戦つてどっちが勝つかわかるじゃん。
分かりきつてるじゃん!!!

一瞬俺の頭の中に逃げるといふ考えが浮かぶ…。
しかし、それと同時に姫香の泣き顔が浮かぶ……。

まあ・俺の脱出には組長倒さなきゃいけないんだよな……。
しゃあねえ! やつてやるぜ!!

俺は心の中で意気込み、目の前に突き刺さっている日本刀を引き抜
いた。

「よし。ルールは簡単だ、私かお前どっちかが倒れるまでやり続け
る、いいな?」

「やつてやろうじゃねえか……。」

俺は組長をにらみながらカッコをつけて言うが・実際はガクブル
ニヤーニヤー状態だ。

しかし、隣で泣きじゃくっている姫香を見ると、不思議とその気持
ちも消えていった……。

そのとき、視界の端にたはずの組長の姿が消える。

「なっ……?!?!」

どこ行つた?! 俺はすばやく周りを見渡す。
すると俺の死角から声がする。

「この程度で私を見失つたか……?」

声のした方を見る、いない。

「やはり、口だけの男だったか……。」
くっ……。どこだ? どこにいやがる!!

いくら周りを見ても組長の姿を捉えられない。

「この程度の男じゃ、姫香は守れんなぁ……。」

くそ! くそ!! どこだ?! どこに居るんだ!!?

そのとき、泣きじゃくっていたはずの姫香が叫んだ。

「健太！ 落ち着け！ そうすれば、そうすれば・・・きっと見えるはずだ！」

そういった後姫香はまた、顔をうつむける。

姫香・・・。自分は泣いていても、俺を心配するのか・・・。

あい、分かった。お前はそこでゆっくり泣いている！ その間に俺がこの馬鹿野郎をぶつ潰す！

俺はゆっくり目を閉じるそして、周りの空気に全神経を向ける。

「・・・何かが変わった・・・？」

組長の驚く声が聞こえる。

よし・・・もつとだ・・・もつと神経を研ぎ澄ませ。

「これ以上時間を与えると面倒なことになりそうだ……。けりをつけさせてもらう！」

組長が言った瞬間、ひゅつと空を裂くような音が聞こえる。

俺は目を開き、音がしたその場所へ刀を置いた。

ガキイン

金属と金属のぶつかる音が部屋中に響き渡る。

目の前には組長の姿がある。

「やっと捕まえたぜ？ 馬鹿野郎。」

「捕らえたことは、評価するが……ここからどうする気だ？」

組長は俺の刀を吹き飛ばそうと全力をこめて刀を押し上げようとしている。

しかし、そこに意識を集中させているのか、足元がおろそかだぜ？

俺はすばやくしゃがみ、足払いをかける。

「なっ！！？」

組長は、驚きの声を上げて、後ろに倒れていく。

俺はその瞬間を見逃さず。倒れていく組長の握る日本刀を狙って、フルスイングした。

またも金属同士のぶつかる音が響く。そして、組長の持っていた日本刀は俺の右方へ飛んでいく。

「はぁ……はぁ……チェックメイトだ……」

俺は尻餅をついている組長を見下ろしながら言った。

「ふん……どつちかが倒れるまでだぞ？」

「何言ってるんだ……。もう既にあんたが倒れてるだろうが……」

俺はちよつとあきれて組長に言った。

「何がだ……。私が言った『倒れる』はどちらかがおきなくなるまでだ。」

組長は尻をはたきながら、立ち上がる。しかし、どうみてもふらふらだ。

もう年なんじゃないんだろうか……？

「そうかい。でも、悪い。これ以上やると、お姫様に俺が殺されかない。」

「お姫様だと？ そんな奴の前に私がお前を殺すぞ？」
そついつて組長は拳を握る。

「分かった分かった。じゃあ、おきなくなるまでな。」

俺は日本刀を投げ捨てる。そして、拳を握る。

「どういつつもりだ？」

「何、あんたに大怪我させないための配慮と俺の命のための配慮をただけだ。」

そついつて俺は姫香のほうを見る。

「で、お姫様。俺はこいつをどうすりゃいいんだ？」

うつむいていた姫香は顔を上げ、そして、涙をふき取り。
人差し指を立て、俺に命令した。

「下僕……いや……坂元健太。私の最後の命令だ！」

「なんなりと。」

「そいつをぶん殴れ……！」

俺はその命令と同時に、拳を突き出した。

組長もあわてて拳を突き出すが、俺のほほを少しかすめ空を裂いた。
「ぐはっ!!!」

うめき声を上げて、組長は俺の体へ倒れ掛かる、そして、一言言っ
た。

「私の娘を頼んだ・・ぞ」

そういつて動かなくなった。

いやいや、本当にもう・・。

その負けず嫌い、意地っ張り、あんたはまさしく姫香の親父だよ・
。

俺は組長をゆっくり床に倒し、姫香の元へ歩いていく。

「さて。脱出するか？」

俺は姫香に笑いかける。

「ふん。当たり前だ、さっさと行く。」

あいよ・・じゃあ、行こうじゃないか・・。

そのとき、この部屋のドアが勢い良く開かれる。

振り返ると・・そこには顔の怖いおじさんたちが大勢・・。

も………もしかして。

「貴様!! 逃がさんぞ!!」

「組長によくもお!!!」

怒声が部屋中に響き渡る。

そして、顔の怖いおじさんたちが俺のほうへ向かってくるじゃない
か!

「おいおいおい。最後の、最後までこれかよ・・。?」

俺はあきれたような声を漏らす。

「ふん。いいじゃないか、ラストくらい派手に行こう」

いや、俺の記憶が正しければラストどころか最初から派手だったよ
うな・・。

「はぁ・・・」

ため息をついて俺はうつむく。

そのとき、姫香の綺麗な黒髪がなびいて、俺の横を通り抜ける。

俺が顔を上げると姫香が笑顔で俺に手を差し伸べている。

「さぁ！ 脱出しよう！！」

俺は正直驚いた。今までずっと仏頂面で、笑った顔なんてほとんど見せてなかった姫香が笑顔になっていることに。

一瞬、見とれてしまった・・・。

「ああ！」

答えて姫香の手を握る。そして、その手を引いて走り出す。

間一髪のところでおじさんたちの手を避けて、俺達は走っていく。

そう、このドアを出れば脱出完了だ！

俺は勢い良くドアを開けて、外に飛び出したのだった。

これで、俺とお姫様の大脱出は終わりを告げた。

最終話？ お姫様との大脱出 完了！（後書き）

長らくお待たせいたしました。

ついに、この作品の第1部が終了しました！

次の話はまだ一応、第1部なんですけどね・・・w

でも、次の話が終わると、この作品は第1部完つてことになるわけですww

まあ、皆様楽しみにしててくださいw

姫香のツンデレはまだまだ続くはずです！（え

『制作裏話』

えー。短編のときと比べてかなり長くなってますw

組長と健太の戦いが長くなってるね・・・w

ちよつと長くしすぎたかなあとwww

ここまで読んでくださり感謝です。

ご感想＆評価お待ちしております。

では、失礼します。

第13話 エピローグ? いいえ、まだまだ続きます

今日は終業式だ……。

岩の独房より、はちゃめちな脱出劇を繰り広げた次の日が終業式とは中々つらいもんだ。

俺としては今日一日はぜひと休みたかったんだがなあ……。

『終業式ぐらいは学校に行け!』と今更親ぶる両親によって突き出されちまった。

っていうか、そもそも。お前らが俺をあんな場所に贈った張本人だろ?

何故、怒っているのか…。

俺はため息をつきながら、自分の通う高校へ進んでいるとパツと目の前に人影が現れた。

一体誰だ……?

俺はゆっくり顔を上げた…。そこに居た人影の正体は……

「ひ、ひめかあ!!!?」

大声でその人物の名前を叫んだ。

「ふん。いつでもお前はマヌケな下僕だな」

「な、なななななな、なんでお前がここになるよ!? しかも、制服よくみりゃ俺の高校のじゃねーか?! それ!!!?」

そうだ。あのはちゃめちゃ脱出劇で俺の事を勝手に下僕扱いし、命令を下していた傍若無人女。柊姫香ひいらぎひめかがそこに居たのだ。

「私がお前の学校にいと困ることもある?」

ええ。ありますとも、とつてもいっぱいね。

できることなら、箇条書きにして差し上げましょうか?

「まあ、仮にお前が困ろうと私は関係ないこと」

ほら、出たよ。特殊能力、傍若無人。いやになっちゃうね、いや、ほんと

「何か言った?」

「い、いえ、何も」

いきなり話しかけられ一瞬あわててしまう。

「といわけだ。新学期からよろしく頼んだ。下僕」

あれ？新学期？

「え、お前今日から学校に来るんじゃないのか？」

「いや、終業式からではキリが悪い。だから、新学期からだ」
へえーなるほどねえ。って、あれ？

「じゃあ、お前は何で今日制服着て俺の前に現れたの？」

姫香の体が驚いたようにはなる。

「こ、これは…そ、その、お前、健太に見せ……」

んあ？ 良く聞こえねえ…。

俺は良く聞こうと耳に手を添えるしぐさをしたとき、腕時計が目に入った。

その時計はとんでもない時間を示していた。

「つ、つまりだな……お、お前に、私は、べ、別に深いわけは……」

「遅刻だあああ……！！！！！！！！！！」

俺が急に叫び声を上げたため、姫香が驚いた顔をする。

「はあ？！」

「やばいやばいやばい！！ 遅刻、遅刻、遅刻う！！ 全力疾走！

！！」

俺はあわてて走り出す。

「え？！ ちょー！！ 健太あ！！」

姫香が何か言いかけていたが、今は聞ける時間はない。

俺の学校は遅刻にだけはバカみたいに厳しいんだ！

急げ、急げ！！

俺は全力で学校に向かって走り出す。

そのまま正面を向いて、学校まで突っ走ろうとするが俺は一応振り返って姫香に手を振った。

すると姫香もゆっくり手を上げて俺に振りかえした。

いつもとおんなじ仏頂面だ。

まあ、話は今度聞かせてもらうぜ。

しかしなあ。姫香が俺の学校に転入してくるか…。どうなることやら。

まあ、耐え難いもならば、脱出を図らせてもらうとしようかね。

第13話 エピローグ？ いいえ、まだまだ続きます（後書き）

はい、というわけこの物語はまだまだ続く様子です。
皆様。よろしく願います。

内容は短編版と同じようにするつもりだったんですが
思った以上に変わってしまったw

まあ、姫香が可愛くかけた気がするのでいいかなあとw（え

ご感想＆評価＆ご指摘お待ちしております。

ここまで読んでくださり感謝です。

では、失礼します。

第14話 嵐は突然やってくる

この日がついにやってきた。

新学期の幕開けである。

高校1年生のラストを飾る、3学期がやってきた。

人によつては最後は楽しくしたいとか、ワクワクしてる人が居るところだろう。

だが、俺はそれの真逆だ。

この先の生活について多大な不安を抱えている。

それもこれも、すべてはあの女。^{ひいらぎひめが}柊姫香が転入してくることが原因だ。

まあね、別に同じクラスになるって決まったわけじゃないんだが……。あいつのことだ別のクラスだろうとお構いなしにいろいろ命令してくるに決まってる。

はあ……………憂鬱だ……。

「はあ……………」

思わずでかい声でため息をついてしまった。

「ん？ 健太。どうしたんだい、そんな大きなため息ついて」

「ああ？ 聞こえたか？」

俺はあえて無意識だったことを主張するかのように答える。

「当たり前じゃないか。あんなに大きな声でため息疲れたら聞こえちゃうよ」

そういつて笑うのが俺と同じクラスの男子。河野智也^{かわのともや}だ。

言い忘れてたが、現在俺は自分の教室で担任が来るのを待っている状態なのだ。

まあ、こんなところでため息つけば、そりゃ友人の耳にも入るわな。でも、周りもそれなりに騒いでいたから、聞こえないって思ったんだけどなあ……

「それで、健太。何かあったのかい？」

河野が心配半分好奇心半分といった顔で俺に聞いてくる。

「いや、あつたら嫌な最悪の事態を想像してたら、ため息が出たんだよ」

ごまかすように説明する。まあ、でも。あながち間違っちゃいないだろ。

「へえ。そうなんだ」

俺から帰ってきた答えが想像以下だったのだろう、河野はつまらないといった顔で返事をする。

こいつは本当に良く顔に心情が表れる奴だ。

まあ、でも。こいつ以上に顔に思っていることが表れる奴を1人しっている。

「ういーーーーっす!!!」

元気な掛け声で教室のドアを開け放ち、奴が入ってくる。

クラスメイトその2。にしかずき西一樹だ。

こいつは、よく言えば元気一杯。悪く言えば単純馬鹿だ。

その単純馬鹿は俺と河野が集まってるのに気づき近寄ってくる。

「よお！ 坂元に智也!!! 久しぶり!!!!」

そういつてぐつと親指を立てる友人に俺も面倒ながら指を立て返してやる。

ちなみに河野は笑顔で指を立て返していた。

というわけで、今紹介したこの二人が主に俺とつるむ仲間だ。今後普通に付き合って行きたいと思います、はい…。

それから程なくして担任が教室に上がってきた。

ジャージ姿の中年男性で見るからに体育会系と分かる担任だ。

「おーい。早く席に着けー」

声をかけられ席を立てていた生徒たちは各々の席へ戻っていく。

河野と西も例外ではない。

全員が席に着いたのを確認して担任が話し始める。

まあ、こっからはきくに及ばない話なんで、省略。

ぶつちやけると俺自身良く覚えていないんだ。

というわけで時飛んで始業式。

全校生徒は体育館に集められて校長やらなんやらの長々した話をふらふらしながら聞いていた。

そのとき、聞き覚えのある名前が呼ばれ俺の神経は一気に活性化した。

姫香…？ シュウ…？ リサ…？ わつつ？ なんだって？！

チョット待て。転入して来るのは姫香だけじゃないのかっ！！？

「それでは、転入生を代表して、高橋修一君たかはししゅいちより挨拶を」

そういつて校長が見覚えのある優男にマイクを手渡す。

おいおいおいおい。あいつは……あいつは…

「皆さん、初めまして。ただいまご紹介に預かりました、高橋です」
そうとても丁寧な言葉で話し始めるのは忘れもしないあの男。

あの石の牢獄であった、四天王の1人。“美のシュウ”そいつだ。
その隣には同じく四天王の1人。“超能力のリサ”もいる。

そして、その隣に仁王立ちで腕組みをして偉そうに立っているのは、
あいつだ。

わがままお姫様。柊姫香だ。

三人の姿を見て、俺は失神しそうになる。

ああ…ぐっばい。俺の普通の日々……そして、ようこそこの野郎。
ハチャメチャな日々。

シュウの挨拶も右から左で聞かずに俺は立ち尽くすのだった。

そして、始業式が終わり体育館から出るとき。

教室でした以上に大きなため息をついた。

それを聞きつけた河野が俺に近づいてくる。

「健太。またため息をついてどうしたんだい？」

「ん？ ああ…俺…明日から学校来るのが嫌になっちまった…」
「いきなりどうしたんだい」

「説明すると長くなるから、ね。聞くなよ、というか、聞かないで」
俺は肩を落としながら、河野に言う。

すると河野は「分かったよ」と答えて俺から遠のいていった。

ああ……嫌だあ……。叫びたい……。

はあ。俺の平穩はいつ来るのやら……。

神様。お願いしますよ。せめて、あいつとは別のクラスに……。
そう切に願う、俺だった。

第14話 嵐は突然やってくる（後書き）

こんばんわ。

どっちの小説も新学期が始まってます。

『姫脱出』はこれから学校編ですよ。
学園物が好きな方はお楽しみにw

ここまで読んでくださり感謝です。

ご感想&ご評価お待ちしております。
それでは、失礼します。

第15話 契約続行

世の中にはいいことが起これば、悪いことも比例しておきると言う。ということは、逆に言えば悪いことが起き続ければ、そのうちいいことが起き続けるということではないだろうか。

そうであってほしい。いや、そうでなくては。

「おい！ 坂元よ。お前は見たかよ」

「はあ？ 一体何をだ」

「だ・か・ら！ 転校生だよ、転校生！！ めっちゃかわいかったよなー！！」

うれしそうに話すのは比較的仲の良い友人西にし一樹である。

西よ。お前は知っているか？ 綺麗な花にはとげがあるって言葉をちなみにあいつ。柊姫香の場合とはひいらぎひめかだけではない毒もある。

ようするに、どんどん問題を引つ張ってくる奴だ。

「ああ。残りわずかな時間でもあんな可愛い子と同じクラスになりたいよなあ……」

「でもさ。僕たちのクラスはこの学年で一番人数が多いよ。転校生はこないんじゃないかなあ……」

もう1人の友人。河野智也かわのともやがつぶやく。

「ちっ…分かってるよ！ いいじゃないか！ 少しぐらい夢見てもよ！」

西が悔しいそうにつぶやく。

そうだった。確かにこのクラスはこの学年の中じゃ一番人数が多いじゃないか。

ということは、だ。転校生が来ることなんてまず…ない。

そうだ、そうだった。すっかり忘れてたよ。これで一安心だ。

そのとき、教室のドアが音を立てて開いた。

担任の体育教師が入ってくる。

そして、その後ろに見覚えのある姿をした女子が……。

西の目が輝き始める。河野は何が楽しいのかニコニコ笑顔。

そして、俺は半ば予想していたが、ショックに耐え切れず顔面蒼白である。

入ってきた女子は。

綺麗になびくロングの黒髪。雪のように真っ白な肌。

キリッとして男らしいのだが、女性らしくもある大きな目。

目の中は獲物を狙う獣のように光り、本性が凶悪なのを物語っている。

体形はすらっとしていてスレンダーという言葉がぴったりだ。

悪く言えば貧なんとやらだ。

そして、この学校の制服を完璧に着こなしてやがる。

その美少女は、柊姫香。

予想はしていたが予想通り過ぎるよ……まったく。

西がうれしそうにこちらを向き親指を立てていることがすぐく腹が立つ。

担任とともに教壇に姫香は仁王立ちする。

「えー。残りわずかだが、このクラスに転校してきた柊姫香だ。皆仲良くしてやれよ。」

じゃあ、一言挨拶を」

担任がそういつて姫香に話を振る。

姫香は教壇から降りて一歩前に出て、ゴホンと咳払いをして。

「柊姫香です。転校してきたばかりでいろいろ分からず、皆様に迷惑をかけるかも知れませんが

残りわずかな時間を皆さんと楽しく過ごしたいと思っていますので、どうぞ、よろしくお願いします」

そういつてにこりと姫香は笑った。

その瞬間。クラスの男子どもはもちろん女子たちすらもその顔の可愛さというかなんというかに悶え始めた。

なんて破壊力だ…。クラス中をいつせいに悶えさせるとは…。ちなみに俺はあまりの気持ち悪さにゾクゾクしていた。

「おう。じゃあ、自己紹介もすんだところで…お前の席は…」
担任が姫香の席をどこにするか考え始める。

「先生。私、坂元君の隣がいいのですが…」
おい。なんて事をいいやがる…。

その瞬間クラス中の目（主に男子）がこっちを向く。
そして、ヒソヒソと小さな声が聞こえてくる。

「おい。なんで坂元なんだよ…」

「くそつ…あいつ」

「え？ 坂元君とあの子ってなんか関係あるの？」

「……………死ねばいいのに」

お前らがそういたいのは分かる、が、最後の奴は怖すぎるぞ…おい。

「うーんでもなあ。坂元の隣には既に他の生徒が…」

よし、いいぞ担任。そのまま、姫香のむちゃな願いを却下してくれ。
「そういわずに。先生お願いします」

そういつて姫香が何かの写真をチラッと見せたことを俺は見逃さなかった。

「あ…え…なんでそれを？ おおおう、分かった。じゃあ、柊は坂元の隣に行け」

どうやら俺は担任を買収する瞬間を目撃してしまったようだ。

姫香は担任に軽く会釈をして勝ち誇った顔で俺の隣席へ。

そして、姫香は自分の席へ座る前に俺の机の上に小さな紙切れを置いた。

なんだこりゃ…。

俺はゆっくりとそれを開いたそこには信じたくないことが書かれていた。

『あの約束は継続だ。もちろん、お前に拒否権はない』

俺はまた頭を抱えるのだった。

第15話 契約続行（後書き）

皆様、お久しぶりです。

やっとこちらでも更新できました。

まさか、2ヶ月も放置していたとは…

ここまで読んでくださり感謝です。

ご感想&評価お待ちしております。

では、失礼します。

第16話 友達作りって結局行動するかしないかじゃないかな

あああ。寒い、寒すぎるぞ。おい。

現在。俺、坂元健太さかもとけんたは屋上にいる。

つてか、屋上つて確か立ち入り禁止じゃなかったか…？

そんなことを思い出し、ふと自分の通ってきたドアの方を見ると
ドアの足元には、鎖が引きちぎられていた。

誰だ？！ 誰がやったんだ？！ 俺より先に来てたこいつらか？！
既に、ナルシストの優男である“美のシュウ”こと高橋修一たかはししゅういちとゴス
ロリ少女の“超能力のリサ”の二人がいた。

リサは一応制服を着ているが、胸には馬鹿でかいリボンがついてい
た。

それは校則的にはどうなんだろうかと思う。

というか、俺はこいつの本名を知らないんだよな。なんて言うんだ
ろ…。

「……高橋理沙子たかはしりさこ」

「え…？」

俺は思わず聞き返した。

「二回も言わせないで、この下種野朗」

あれ？ いきなり罵倒された気がするんだけど…。

「あんたが名前分らないって言うから、私がわざわざ教えてあげ
たのよ。この馬鹿野朗」

「え………そうなのか…？ ありが…つて、ちょっと待てい！」

「何よ。アホ野朗」

「俺、言ってないし！ 思っただけなんですけどっ？！」

俺が大きな声を出すと、シュウがこつちを向いて説明してくれる。

「この子が、超能力者ってのは知ってるよね？」

俺はとりあえずうなずいておく。

「で、この子の能力は、何も君と戦ったときに使った力だけじゃな

いんだ」

「と、言いますと…?」

「この子は、超能力と言えるものならなんでも使えるんだよ」
な、なんですと?! それって、もしかしてもしかして?!

「えー……………つまり?」

「重力操作、念力、空中浮遊、治癒能力、変化、読心、念話、身体強化、透視、未来予知、魔法……………浮かぶ限りであげるとこんな感じかな…」

まだあるの!? ってまで。最後のは超能力じゃないだろうが…。
そんなことを思っていると、リサが口を開く。

「もう。おにいちゃん。どうしてそんな阿呆野郎に説明するのよ?」
また罵倒ですか? ねえ。あなたはどれだけ俺が嫌いなんですか?
「は? 分かりきったこと聞かないで。おにいちゃん以外の男なんて死ねばいい…」

リサはそういうと、シュウの腕に抱きつく。……………おにいちゃん?
「どういうことだ?!」俺はすぐ隣のシュウを問い詰める。

「あれ? 説明してなかったかい…?」

シュウは不思議そうな顔をして、ふさあつと髪をかきあげる。

うわ……………うぜえ……………。

「僕と理沙子は兄妹なんだ。言ってなかったかい?」
言ってねえよ!!!

「ふむ…僕は言っただつたんだが…」

こんの糞ナルシストが、こんなかわいい妹がいるだと?! うらやまし……………くねえか…

「死ね」

「ぐふう!!!?」

リサの眩きと同時に俺の腹には何か異物がぶつかった。
俺は腹を押さえながら、膝を地面につく。

「おにいちゃんを悪く言わないで」

いや、言ってないし。思っただけなんですけど…。

「思うことも許さない」そういつてリサが俺を睨み付ける……すみません。

俺はとりあえず謝っておく。

と、そうこうしていると、屋上のドアが勢い良く開いた。いや…開かれた…。

つてか、壊れたっ?!!

ドアを壊したのは、美少女だった。それはもう、間違いないくらいの美少女だった。

その美少女はドアが壊れたこともまったく気にせずこちらに歩いてくる。

美少女は開口一番こう言った。

「寒いな……ここ」

「お前が待たせたんじゃないか!!!」俺は思わず叫んでいた。

「五月蠅い。この下僕。お前に、突っ込まれる筋合いはない」

じゃあ、誰にあるってんだ、この野郎

「とにかく、今日。お前たちをここに集めたのは、私の計画に協力してもらったためだ!」

美少女……^{ひいらぎつめか}柊姫香は高らかに俺たちに宣言した。

長くてツヤのある黒髪に、モデルのように細い足、キリッとしていて、でも決して小さくない目をしている誰もが認める美少女だ。

こいつの周りだけ光って見える程に、綺麗な女の子である。

ただ、残念な事が一つあるとすれば、お世辞にも豊満とはいえない胸が…。

「何かいったか？」姫香がこっちをギロリと睨み付けてくる。いえ、何も言っていないでふ。

「さて、ということ…。もちろん、お前らは私に協力してくれるよな? というか、しなさい」

もはや疑問系じゃなく、命令形である。

「協力するのは勿論なのですが、その計画とは一体?」

おい。ちよっと待て。話を進めようとするな。

「ふふん。よく聞いてくれた……」得意げに鼻を鳴らす姫香。
やめろ、やめてくれ。話を進めるな。

「その計画は……『人類仲良し計画』!」

あれ? どっかで聞いたことがあるような、名前。

「つて、なんだそれは?!」

「まず手始めにこの高校の生徒達と全員戦つて、私の配下に置き、
領土を拡げていき……」

つて、おいおいおいおい。既に、『仲良し』じゃないんじゃないか。

「そして、皆で仲良く国をつくり……」

「やつめーいいいい!!!!!!」

俺は我慢に耐えかねて、大声を出した。

「なんなの、一体?」姫香はきよんとしている。

「『なんなの、一体?』じゃないつて。お前いつからそんな電波女
になつちやつたの?!

いや、最初から大分電波だったけど、それはひとまず置いて、
何がしたいのさつ?!」

「え……私は……ただ……」なんだか知らんが口ごもる姫香。

「ただ……?」

「『友達』……いっぱい……ほしいなあ……つて……」

少し落ち込んだように、姫香は呟いた。え……? 本当に『仲良し計画』
なのか?

すると姫香は突然「もういい。わかったわよ。しないししない
! もう協力しなくていい!!」と叫んで、階段の方へ走って行っ
た。

するとさっきまでずっと黙っていた、リサが口を開いた。

「お嬢様は……学校に行ったことがないの……」

「は……?」俺はゆっくりリサのほうを向く。

「お嬢様は、小中と学校に行つてないわ。というか、行けなかった
の」

なんで…？ それはどうして…？

「詳しいことは、組長の許可がいるからいえないわ」

リサはそれだけいうと、また黙った。

つまり、姫香は今回学校に来たのが初めてで、どうやって友達を作ったら良いかわからなくて……。

ああ、もう。なんて世話の焼けるお姫様なんだ？！

学校に行ったことがなくても、友達の作り方ぐらいわかるだろうが。つてか、今日のクラスでの大人びた挨拶はなんだったんだ！？

いや…あの挨拶…馬鹿丁寧すぎないか…？

俺はてつきりあいつが、そういう猫を被ったキャラで行く気なのか
と思つてたが…

もしかして、あれは…誰に考えてもらつた文章を読んだだけとか…。

「あるわよ。その通り。クラスでの挨拶とかは全部私とおにいちゃん
で考えたわ」

リサが俺の仮定した可能性を肯定してくれる。

つてことは……あいつは、あいつはただ友達を作りたくて…。

「ああ！！ もう！！」

俺はやけくそ気味に怒鳴つて、走り出していた。

ほんつとに世話のかかる、面倒なお姫様だ。

「あの本……嘘じゃん……」

「相手を支配下に置くことが、一番近道とか…」

「いたつ……！！」

俺は階段の下にあるちよつとしたスペースに隠れている姫香を見つ
け出した。

まったく、なんてホコリっぱいところにいるんだ。

ま、女子トイレとかに隠れられてなかったからよかったけど…。

「健太……？」

姫香がゆつくりとこつちを見た。

俺はゆつくり姫香に近づいていき、手をとって立ち上がらせる。

「え？」

「馬鹿か？」俺は姫香の顔を見て一言。

「は？」姫香はまだよくわからないといった様子だったので、俺は言葉を続ける。

「お前は、馬鹿か？ 馬鹿なんですか？」

すると、姫香の顔がだんだん赤くなっていく……あれ？ いいすぎたか？

こちらでちよつと馬鹿というのは抑えて、俺は話す。

「『友達』がほしいなら、普通にそういえ。あんな変な計画を立てるんじゃないってえ。

言ってくれば、俺、いや、シュウやりサだって、すぐ友達になつてやるさ」

「え？ え？」

「『友達』はな、倒してなるもんじゃないんだ。領土なんて要らないんだ

必要なのは相手と友達になりたいって心だけなんだ、分かるか？」

姫香は少しだけ、うなずいた。分かってくれてるのかな……？

「だからさ。お前がその気持ちを持つてるってことは、後は簡単に友達は出来るんだ」

「うん……うん」

「だから、くだらない計画立てる前に行動しろっ」

俺はそういうと、姫香のほほを引っ張り上げた。勿論、そんなに思いつきじゃないぞ。

「ふぁにふるふぁ？」

「お前は本当に馬鹿野郎だ」俺はそういつて思わず笑った。

いやはや、本当にこうやって見るとこいつも可愛く見えてくるから、不思議だよな……。

そんなことを考えていると、俺はついついこいつの頬から手を離すの忘れてて…。

「いいふあふえんにしろ……」

姫香から怒りのオーラが出てることにまったく気づかなくて……。俺の手はいきなり払いのけられた。そして……目の前に怒りのパワーためた姫香が…。

え……？ 今結構いいシーンで…。

「どうやら、下僕は私と対等だと思ってたようだな…」

あれ？ あるえ……？ もしかして、なんか地雷踏んだ？

姫香の後ろに見える鬼のようなオーラを感じながら俺は思っていた。

姫香は、やっぱりこういう感じが似合う……と。

しおらしいのは柄じゃないからな、うん。

とか、思っている暇があれば逃げなくては。

そして、俺は一目散に逃げ出した。

「待て！！ この下僕！！ 奴隷！！！」

待てといわれて待つ馬鹿はいないと何度言えば分かる？！

俺は下校時間向かえ誰もいなかった廊下を全速力で走りぬけていく。

「見て。おにいちゃん。お嬢様、元気になったみたい」

「ああ。やつぱり、ああやってる二人が一番美しいねえ…」

「ほんと…憎たらしいぐらいに、いい笑顔…」

第16話 友達作りって結局行動するかしないかじゃないかな（後書き）

お久しぶりです。

絶対皆前回の話とか覚えてないと思います。

ですので、一から読み直してみてくださいね。

書いてた時期がかなり前で、大分直したい部分とかあるけど

それはそれで記念なので直さない方向でいます。

ええ。決して面倒なわけではないですよ。

もしよろしければ感想&評価お願いします。

では。失礼します。

第17話 集中力って結構大事だと思うよ

翌日。教室には友達作りに励む、姫香の姿があった。

手始めにといった感じなのか。クラスメイト全員に声をかけている様子だ。

「私と友達になってください！」

教室に響くほどの大きな声で、クラスメイト1人1人に声をかけている。

声をかけられたクラスメイト達は、とても戸惑っていた。主に男子。そりゃそうだ。友達なんて、あんな風に声をかけてならなくても自然になるもので

普通に小中学校を過ごした奴らなら、なおさらそう思ってるだろう。そんな当たり前のことを知らなかった姫香を、俺は少し可愛そうにも感じた。

そもそも、なんで姫香は学校に行っていないのだろうか…。

高校の授業なんてついていけないのか…？ 少し不安になってきた。

まあ、なるようになるんじゃないか。

俺はひとまず、考えることをやめて、持ってきていた水筒を取り出し、口に運ぶ。

ふう……………今日もお茶が旨い。

俺はもう一口飲もうと、水筒を傾けた時、ふと窓の外に目が行った。窓の向こうには見慣れた顔が浮いて居た。

「ぶふっ……………!!!!!!」

口の中に含んでいた、美味しい美味しいお茶を、せつかくのお茶を、教室の窓に吹きかけてしまった。

窓の向こうの人物は、すごくいやそうな顔をしながら、俺を睨み付けている。

そして、教室の中では俺が盛大に噴出したことに気づいたクラスメイトからの白い目が…。

いや、だって、しょうがない？

外見たら、顔見知りが浮いているんだぜ。誰だって噴出すよ、そんな状況。

さて、その外に浮いている人物というのは……高橋理沙子。通称“超能力のリサ”

とりあえず、俺は窓を開けてみる。

「いちいちアクションが大きくて、ウザイし、気持ちが悪いわ」
開口一番から俺に対するダメだしだった。いや、これはもはや悪口だ…。

「あなたに今日は用があるの。触りたくないけど」

ねえ？ どうしてあなたは僕にそんなに辺りがキツイんですか。

「はあ？ 前も言ったでしょう？ お兄ちゃん以外の男は死ね」

はい。お前は病的なまでのブラコンですものね。

ちなみに、この人は読心術が使えるそうなので、モノログにも普通に会話に入ってきます。俺のプライバシーって一体どこにあるのかな。

「で、俺に用ってどういうことだ？」

「なんでも、組長があんたに会いたいんだって」

組長…？ 姫香のお父さんが、俺に会いたいだって、なんでまた。

「まあ、とにかくあなたに拒否権はないから」

「お前までそういうキャラなのか…」

どうして俺の周りには話を聞かない奴らばかりなのだろうか。本気で泣きたい。

「じゃあ、貴方を運ぶわ…」

といって、リサが何かしようとする。

「って、ちょっと待て！俺まだ授業があるんだけど？！」

そう。今は休み時間だけで、まだまだ授業がある。

別に特別授業に出たいわけでもない。が、しかし。こいつについていくぐらいなら、ここで授業を受けた方が数倍ましな気がする……。断ろうとしたら……。

「貴方に拒否権はない……」

「やっぱりそういう答えかつ……！」

大声を出しすぎて、教室中の目が俺のほうを向いた。

そこで、俺はあることに気づく。

「お前……堂々と浮いてるけど……ばれて良いのか？」

そう。リサは普通な感じで教室の外の空中に浮かんでいる。

これは、外から見ても中から見てもやばいのではないだろうか……。特に真下からとか……。

「死ね」

言葉と同時に俺の腹に何か物体がぶつかる。ぐふ……鳩尾に入った……。俺は声を出せないまま、窓枠にもたれかかる。

「私は今、あなた以外の人の光は反射していないの」

えーっと……どういうことでしょうか……。

「人間が物体を認識するときに必要なのは光。光の反射によって、そこに物体があることを認識している。だけど、今の私は貴方の目に入る光以外は反射していない。だから……」

「だから……？」

「私は貴方以外に見えていない」

……え？マジで？

「マジで。ちなみに、音も他の人に聞こえないよううまく細工しているわ」

そういつてリサは無表情でVサイン。

「ってことは……俺は今……誰もいない……はず……の空に話しかけていたのか……？」

「何も知らない人から見ればそう写るわ」

それってとっても痛い人に見られるのでは!?

いきなり、窓にお茶を吹きかけ、窓を開け放ち、空に向かって大声で話す…。

「すごい痛い人じゃないかつ!!!」

「大丈夫。貴方は前から痛い人…」

リサが無機質な声でそう言ったと同時に俺の視界が勢い良く回った。

それはとてつもない回転だった。

遊園地のコーヒークップを、筋肉男で馬鹿力の奴に回させるよりも凄まじい勢いで回っているような感じだ。

え、それってどんな感じ?

いや、俺そんな奴らとコーヒークップ乗ったことないぞ。

筋肉といえば、あの四天王の人、元気かな。

興味ねーよ。そんなもん。

とか、あまりの気分の悪さに脳内会話が発生していた。

そんな風に脳内会話が進んでいる間に、俺は教室ではない場所に立っていた。

「ここは…?」

と、言いたかったが、さっきの回転の所為で口からは言葉が出なかった。

出したら、きつと別のものが噴出していたよ。

「ここは、私たちの本拠地…言うならば、事務所」

それどっちでも一緒じゃねえ?!

しかし、事務所って言うてもここどうみても……射撃演習場じゃないか。

「良く来たな。小僧」

ツツコミを入れていると、いきなり話しかけられた。

話しかけてきた相手は勿論、あの人。姫香のお父さんであり、ここ

の組織の長、組長。

そういえば、俺はこの人の本名知らないんだよね…。ま、いつか。

「理沙子、ご苦労だったな」

「ありがとうございます」リサがぺこりと頭を下げる。

そして、組長が俺を見て問いかける。

「で、お前はなんでここに呼ばれたか分かるか」

「いえ……………まったく検討もつかないのですが…」

ちよつと挙動不審で答える。すると、組長さんはいきなり俺に向かって拳銃を向けた。

「なっ?!」

身構える…けど、拳銃相手に身構えても何の意味もないんじゃないか。

と、組長はゆつくりと拳銃を下げ、俺に向かって放り投げた。

俺はその拳銃を思わずキヤツチして、組長を見る。

「それで、あの的を撃ち抜いてみる」

え…?

組長の声と同時に、この射撃演習場の壁に小さな的が現れた。が、遠い。遠すぎる。なんだこの距離……………50mはあるんじゃないか…。

「もしかして、あの的に当てるのですか…?」

「それ以外に何がある?」

無茶を言っな。こんな距離当たるかつ。

「心配するな。弾は3発ある。1発でも当たれば帰らしてやる」

「当たらなかった場合は…?」

「……………ああ。大丈夫だ」

何ですか、今の間は!? ねえ!! 何さ!!?

「五月蠅い奴ね…さつさと撃ちなさいよ。私が貴方の頭にぶち込むわよ?」

何を?! 何をぶち込むんだよ!

もはや俺に残された選択肢は1つしかないのか。

しょうがない。1発でも当てて、さっさとかえってやる。

俺は的を見て、目を瞑った。

まずはあの距離を当てるためには集中だ。

俺は集中するときに、目を瞑る癖がある。これをやるとどうも集中力が上がる。

……………気がする。

大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。
よし。

俺は目を開きもう一度的を見て。拳銃を向ける。

そして、引き金を引く。さっさと終わらせたいがために、引き金を引き続ける。

乾いた銃声が、演習場の中に響きわたる。

つて、肩。肩が痛い。反動ですごく肩が痛いんですけど。

俺は肩を抑えながら、的をしてみる。

ん……………当たったのかな。

すると組長が口を開いた。

「もういい。分かった。帰れ」

おお。つてことは、命中したのか。

「よっしゃ！」と思わずガッツポーズ。

「ふん。たった1発当てただけで…」

「いや、良く見る。理沙子……………」

「え…？ これは…」

ん。何か言ってますか。

「納得できないけど、今から帰らせてあげるわ」

リサがそう言っただけで近づく。

「はっはっは。俺にかかればこんなもの…」

「調子に乗るな。このミドリムシ野郎」

もはや何？！

と、言いたかったが、言う前に俺はまたあの激しい回転に飲み込まれた。

「3発当てるどころか……同じ穴を通すか……中々じゃないか」
暗くなつた演習場に組長……柊帝牙ひいらぎていがの声が響いていた。

そして、帝牙は先ほど健太の使っていた拳銃に弾をこめる。

「だが……それだけでは……あの子を任せられないなあ……」

呟いて、帝牙は拳銃の引き金を引いた。

銃声の後、銃口からは煙が立ち上る。

帝牙の放った銃弾は、的のど真ん中を撃ち抜いていた。

銃痕は1発分だけだが、このとき、帝牙の放った銃弾は5発。

彼は全ての弾を同じ穴を通したのだった。

第18話 光陰矢のごとしとはよく言ったもの

時は進んで、あつという間に三月になっていた。

いやはや思い返してみてもあつという間だったよ。

姫香のいきなりの転校から、なんとまあ、もう二ヶ月も経過しているというのだから、時の流れが速いことには驚くばかりである。

ま、途中でちよつとした誤解、というか、周りからドン引きされる事件が起きてたけど。

それ以外はまったくもって平凡だったと言えるだろう。

うん、これだね。これが俺の望む平和な日常だよ。わーい。

そんなことを考えながら、HRが始まるのを待っていると、目の前に西一樹にしかずきという特筆すべきポイントのないような、もう、ほんとにモブのような友人だ。

「おい。坂元。てめえ今俺に対して失礼なことを考えてないか？」

「え？ 考えてねーよ？ 何を証拠に言ってるやがる」

「そうか。なんとなくそんな気がしたんだ」

実はちよつとびっくりしたのは内緒である。いや、だって俺の知ってる奴の中に、平然と人の心の中を読む人があるんだもん。

一瞬こいつもか、と思ったね、マジで。

「で？ 何のようだよ」俺は目の前に立っている西に問いかける。

「何って勿論、明日のスポーツ大会についてだろうが」

ああ。そういえば、そんな行事あったね。

スポーツ大会。まあ、その名の通りスポーツ大会だよ。

学校全体で、学年入り乱れて、1日中スポーツをするという行事である。

ちなみに、三年生の生徒は参加してこない。なぜなら、センター試験の翌日だから。

意味が分からない人にはヒントをあげよう。ヒント、自己採点。

「スポーツ大会では、優勝できるといいね」

ニコニコしながら近づいてきたのは、もう一人の友人河野智也かわのともやだった。

「馬鹿野郎。優勝できたらいいね、じゃない！　優勝するんだ！！」
俺の目の前で西が拳を振り上げる。

「なんでお前はそんなにやる気満々なんだよ……」

「何でって。そりゃ姫香さんにも言われたじゃないか」

え……？あいつそんなこと言ってたの……？

「ああ。そういえば、その集まりのとき健太は呼ばれてなかったね」
さらに智也が俺の横でつぶやいた。え？何それ？俺はぶられてるの？！

「ど、どういうことだ……？」ちょっと泣きそうになりながら二人に聞いてみる。

「えつとだね。姫香さんがある日の放課後に、皆を集めてだね……」
智也が説明を始めた。

ある日の放課後に皆を集めた姫香が、こういったそう。

『皆さん。私は、勝負をすることがあまり好きではありません。しかし、だからといって勝負に負けることは大嫌いです。ですので、皆様。どうか私に力を貸してください！　そして、このクラスを優勝へ導きましょう！！』

とまあ、ツツコミたいところがちょこちよこありますが……。

俺はあえてスルーしておきます。

でまあ、この姫香の言葉でクラスメイトは皆一斉奮起し、優勝を狙っているんだそう。

……なんで俺だけはぶられたんだろ……。考えると泣きそうになるので考えないようにする。

「ま、だからさ。俺らはやる気をださなきゃいけないんだよ」

西はそういつてにこやかに笑う。しかし、俺は笑えなかった。

そして、その日の帰り道。俺は姫香に呼び出された。

「どうした？　なんだか不思議そうな顔」

「いや、なんだか。すごく久しぶりな気がしてな……」

「？　何を言っている。今日も教室で何度もあつたでしょ」

うーん。まあ、そうなんだけどね。だけど、なんだろう。すごく久しぶりな気がする。

具体的な日数で言うなら、もう半年振りぐらいの……。

「なんでもいいけど。で、明日のスポーツ大会に対しての目標は？　え？　そんなこと言わなくちゃいけないの？　マジめんどくせー……。」

とか、思ってたら無言で、すねを蹴られた。

「いつてええええー！！？　な、何すんだよ？！」涙目で叫ぶ。

「いや、お前のことだからめんどくさいとか思ってそうで」

「……そうか」図星でした。

「で、明日お前は どうする？」

どうするっていわれてもな……。俺は特に運動が得意というわけではないし。

それになにより、明日のスポーツ大会の競技がまだわからないんだよね。

競技は当日に発表するんだそうで、生徒たちにはまだ発表されていないのである。

「まあ……わかってるよ……」俺は頭を軽くかきながら姫香に言う。

「明日は勿論優勝……だろ？」

「……わかってるならいい」

そういつて姫香はぷいっとそっぽを向いた。そして、そのまますたすたと歩いていく。

「おい！　何してる？　早く行くぞ。い、一緒に帰るぞ！」

はいはい。わかりました、わかりました。俺は姫香の後を追いかける。

る。

しかし、こうやって姫香と二人きりというのも、本当に久しぶりだな。

あの大脱出劇以来、二人きりになることはそんなになかったからね。」「ところでさ、姫香。なんでクラス全員集めたとき、俺だけ呼んでくれなかったんだ？」

「ああ……忘れてた」

「ひでえ!!!!」

俺は聞かなきゃよかったと後悔しながら、二人並んで帰路についたのだった。

そして、翌日の朝。

スポーツ大会のプログラムが発表されていた。

競技のほうは女子はドッジボール、男子は野球とされていた。

おや？ 俺はそこであることに気づいた。

「スポーツ大会って……二日間あるじゃん……」

そう。スポーツ大会は二日にわたる大規模な行事だったのだ。

しかも、俺ら男子の競技があるのは、今日ではなく明日だった。

周りを見てみると、あれ？ 皆知ってる感じ？

しかし、良く見てみると、一人口をあけてぼかーんとしているヤツがいる。

西だった。

「もしかして、お前も二日あるって知らなかった？」

「ああ……てつきり俺は一日かと思ってたよ……」

まあ、そのなんだ、馬鹿仲間同士仲良くやろうぜ。

「まあ、僕は知っていたんだけどね」横で智也が一言。

「「じゃあ、昨日のうちに言えよ!」」

「知らない方が面白いじゃないか。いやいや、昨日のやる気に満ちていた一樹は、すごく滑稽だったよ」

智也はくつくと人の悪い笑い方をしてみせる。
こいつ性格悪い！！ 絶対わるいよー！！！！

「宣誓！！ 我々、生徒一同は正々堂々と本日と明日の大会、全力を尽くし戦うことを誓います！！！！」

生徒会長の爽やかな宣誓の言葉が校庭に響き渡った。
かくして、私立？？高校のスポーツ大会が開催された。

結構ドラマチックな展開になる…予定？

第18話 光陰矢のごとしとはよく言ったもの（後書き）

お久しぶりです。半年以上経ってますが、ちまちま投稿していくつもりです。

ちなみにこのスポーツ大会の話は全3話で構成される予定です。

読んでくださった方々はありがとうございます。

よかったら感想などをお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4811c/>

お姫様との大脱出！？

2010年12月12日14時33分発行